

氷菓 .....引出しの中  
の記憶.....

ばなナイン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

『刀使ノ巫女』と『氷菓』のクロスオーバー作品です。

登場人物は『とじみこ』からは益子薫、『氷菓』からは折木奉太郎、千反田える、伊原摩耶花、福部里志四人です。

舞台は『氷菓』の神山高校となりますが、全体を包む世界観は『刀使ノ巫女』となりますので、こちらがメインになります。

原作では『氷菓』の四人のクラスは一年、二年を通じて別々ですが、このSSでは折木と千反田、伊原と福部はそれぞれ同じクラスという設定といたします。ちなみに筆者の『氷菓』の情報はアニメとネットの情報だけです。原作の文体とはかけ離れたもの

となるかもしれませんが。原作のファンの方、御了承下さい。

# 目次

第1話

第2話

第3話

第4話

第5話

第6話

第7話

第8話

第9話

第10話

第11話

第12話

1

12

20

28

37

46

54

64

73

84

96

106

第13話

第14話

第15話

第16話

第17話

第18話

117

130

143

155

168

181

# 第1話

「ここ神山高校古典部部室地学準備室は今喧騒につつまれている……放課後にただ本を読んで時間を潰し、文化祭に文集を出すだけだというほぼ活動の根拠も無いこの部活には五人の生徒が所属している……この喧騒の引き金になったのはそのうちの二人、いや一人が騒ぎ立てているだけなのだが……」

「……だから！ ふくちやんの籤運が悪いから席が離れちゃったのよ！ 折角同じクラスになれた、ていうのにく!!」

もはやこの喧嘩の切っ掛けさえ定かでは無いこの言い掛かり……おい、もう一月も前の話まで持ち込むつもりか……？ たく……

伊原摩耶花。何かにつけ俺を目の敵にする小煩い女。もともとこの古典部とは関係のない漫研所属のオタク女子だが、次にあげる俺のダチを追いかけてこの部活に入部したという一途な処もある。

「それって……僕の責任なのかな？ 摩耶花??」

福部里志。この伊原には一方的に責め続けられる事を最善の遣り過し方と『悟り』を

決め込んでいる校内きつての趣味人。手芸部にも所属し総務委員も務め、校内での出来事なら何でも把握してやろうと常に身構えている自称『データベース』

「だってそーじゃん!! 中学の時からふくちゃんとは一度しか同じクラスになった事無いのよ!! そのかわり折木……! なんでアンタとは

小中通してずっと同じクラスだったっていうのよ!! もう信じらんない!!」

……火の粉が俺に…… 言い掛りもあつたものじゃない。こいつら…… 数年振りと同じ教室になった、ただでで大いに喜ぶべき処だろう。つたく…… なら!

「それはな、伊原、籤運という点に関してはお前の方がが悪い。

お前の籤運が良かったのは同じ教室に入れた、ただけの事だ。それにお前の席は何処だったか?」

「……廊下側の前から二番目だけど……?」

「で、里志、お前は?」

「クラスの真ん中、向って窓際の方だけだね」

「つまりだ、伊原が里志と同じぐらい籤運が良ければ、里志と同じ……つまり、教室の中心で愛の巣をこさえる事が出来たってわけだ。

違うか?」

「わあ! そうですね! もしそうだったら……! 摩耶花さん! 諦めないで下さ

い！ 今が駄目でも二学期があります！ それまで籤運を高める為に御百度を踏みましよう！ もし宜しかったら私も御一緒に……！」

相変わらず突拍子もない……こいつの手に掛ると話があらぬ方向へと進み周りを……特に俺を無自覚に振り回す困った部長様だ。

千反田える。歴史あるこの古典部の何代目かは知らん部長様。最初からこの古典部に入部するためにこの神山高校に入学したという古典部のサラブレット……などでは無く、幼い時からのある疑問を解決するためにここ古典部に入部し、部室で俺と運命的な……俺にとつてはやや災難な……出逢いを果すことになる、育ちのいい地方の農家の……やや間の抜けた人のいい娘さん、といったところの女子生徒だ。しかしながら一旦好奇心のスイッチが入ってしまうと……目の輝きが……千反田のアノ目に魅入られるとヒトは金縛りの様に動け無くなり疑問解決へと狩り出されてしまうという……恐るべし怖るべし。

「ち、ちーちゃん……なんにもそこまで……オレキウ!!」

「……おつ、おう……コレがかの有名な……恋バナ、てヤツなのか……！」

ナマでの遣り取りは流石に迫力があるな……」

「ねねー！」

……最後の科白廻しに未だ違和感を感じるのは仕方が無い。こいつ……二年の五

月初旬に他校から編入……学籍は変らないらしいが……俺の教室に入ってしかも俺の前の席、さらに隣は……

「益子さんが入部して下さってまた一段と賑やかになりましたよね！ これも折木さんと一緒にの教室になれたからです！ フフ！」

そうなのだ……一年の時は別の教室だったのが二年のクラス分けでは俺と千反田は同じ教室、しかもどういふ訳か隣の席。俺の席は窓際の最後列というベストプレイスにもかかわらず……

「お前が余計な気を回したからだ。まあ別に是といった害を被る事は無い様だが」  
「でも、益子さん、とても興味が有りの様でしたよ？ ここに来る時も

足速にしてみましたしね！」

確かに……この益子って奴、教室や授業中はいつも面倒クサソーに

机にうつ伏せになってるくせに……席に近い誼で千反田が声を掛けてそのまま雑談、そして俺達の古典部への勧誘。どうせ無理だろうとただ様子を伺って観ただけなんだが三日後……

『おお！ ただ本を読むだけでお茶とお菓子が貰えるのか!!』

『ねねねっ!!』

……という訳でその日の放課後俺達の後をノコノコと部室へ……いや、先頭切っ

て歩いてたな。部活に対してこんな意欲が有る様には思えなかったのに……まあ食いもんに釣られただけかも知らんが。

「まーちゃん！ これは恋バナってモンじゃ無いのよ！ ただ私達は……」

「おう……じゃあ痴話喧嘩か……！ それとも痴情の纏れってヤツか!! それともシユラ……」

「もーやめてーもーわかった!! ふくちゃん！ 今回は許してあげるから！ 次は……無しよ……!」

「何でそうなるかなー……」

まあ、平常運転かな。里志と伊原、もうお互いの好意を隠す事なくこの有様だし。ただその中にちよつとした異分子が混入されただけの事か。異生物も……

益子薫。特別刀剣類管理局伍箇伝校の一つ、岡山にある長船学園からここ公立神山高校に中途編入してきた刀使。背の高さは摩耶花より低く、容姿も摩耶花に劣らず幼さが残る。そのせいか、長船の制服と思しき着装はダブつき気味で、只でさへダルそうに観える態度に更に輪をかけていつもクタびれて居る様な印象を周りに与えている。更に、その背丈の割に不釣合いな武装……刀使という職務はいつ如何なる時にも御刀を身か

ら離さず…… 3 mは有るだろう極端に長い刀を装着してでの学校生活なので在校生徒からはかなり浮きまくっている存在だ。ここに編入した経緯もまた……

「でも凄かったよねー。益子さんのあの剣捌き！ 何処からもなくスツと現れてさ、一瞬の内に真つ二つだよ?! 授業中なのに皆んな窓から釘付けだったよ！ ね、摩耶花!!」

「やめてよ…… ふくちゃん…… アレ…… 物凄く怖かったんだから……！」

「ああアレ…… 俺は窓際だったからな……」

「そうです！ 教室中騒然としてました……！」

千反田…… お前は俺の肩越しに顔を寄せて覗入ってただろ…… 少しはPSと云うモノをだな……

五月の連休明けの午後の授業中、突如グラウンドに荒魂が発生し校内は騒然となった。震災時の避難先がグラウンドであった為に教室から動けず、校内放送で机の下に、との指示も好奇心には勝てず教室に居た生徒達はただ窓からの光景に食入るだけだった。

大きさはそう、体育館位だったか？ 高さはおよそ校舎二階分、脚も十本ぐらいで赤黒く、ニュースで観るより遙かに迫力があつた。そして明かに…… 校舎に向かつて進ん

で来た……

そして…… ホンの瞬間に…… 教室の連中の目にも何が何だか分からない内に…… 胴が二つに切り裂かれていた。

次の日、コイツが俺の教室に編入してきた。

『ういっす…… 刀剣類管理局からの指令で長船からここ神山にきた……』

益子 薫だ……』

当人も先生も何も言わなかったが、コイツが昨日の荒魂を…… 皆んなそう察したんだろう、偶々空いていた席が俺の前って事で軽く声を交わす様になったが…… 他の連中はコイツとの距離を図りかねている様だった。千反田を除いては……

『長船ってどこなんです？ その制服は？ 刀使と云うお仕事は普段はどの様にお過ごしで？ どうしてそんなに眠そうなんです？ 本当にその御刀を振る事が出来るんですか？』 それにこの生き物…… わたし、気になりますっ!!』

『……ウグ……』

コイツ自身、周りの生徒には関心が無い様なので寧ろほつとかれて欲しかったのかも知れんが…… 相手が悪かった。あの目に魅入られて仕舞ったら…… まあ鉾先が俺から逸れてこっちは万々歳だな。

「まあな、あれはたまたまこの辺を定期巡廻してたからだ。荒魂が発生した時オレが一番近かったからな」

「ねえ益子さん、鎌倉に一括管理されていたノ口もこの辺りの神社や祠でお祀りされる事になったんだよね。詳しい事は話せないかも知れないけど、この地域での荒魂の発生が増えたのもやっぱり……」

「……里志！」

「ふ、く、ちゃん!?!」

「ああ……ごめんごめん!! つい気になっちゃって」

「でも、ちゃんとお祀りしていればノ口も荒魂には成らないって云いますし、この前の荒魂も祀られるんですよ!」

「ああ、中規模の御社にな。一応ノ口を祀る系譜の神社だ」

里志の言いたい事もわかる。確かにここ一年の間にこの地域一帯に荒魂を確認、鎮圧する割合が増えた。

去年の鎌倉、東京での騒動での後始末で、管理局側がそれまで二十年もの間鎌倉に貯蔵されていた大量のノ口を全国各地に、つまり各社へ分祀するという一方的な通達を全

国の神社関係者に送り、それまで仮の御神体を祀っていたノロの系譜の神社にも昔の様に本物のノロを安置、御祀りする事となった。

それからだ。荒魂が出現する事が多くなつたのは。何が関係があるんじや無いかと里志じゃなくても勘繰るのに無理はない。ただコイツ本人には氣遣つて誰も訊かなかつただけだ。

「コイ…… 益子サンは現場での鎮圧が主な仕事だろ、こう云う事を訊ねるだけ野暮つてもんだ」

「ああ…… オレはただ上からの命令で動く哀れなコマにしか過ぎん。ここに來たのだから…… 社畜つて奴は辛いもんだぜ！ お前らも社会に出てから覺悟しとけや…… ! ヒヒッ」

「でも！ この校舎内で寝泊りして居るんですよ！ どうしてですか？ 私わたし、氣になり……」

「そこまでだ、千反田。察してやれ」

「はい…… すいません益子さん」

シユンとしたな…… 好奇心を抑えるのも時には親切つてことだぞ。

「それも命令だ。訳は知らん。おそらく宿泊代の経費をケチつただけだろう。まったく

あのおバサンときたら……でも、ここは心地いいな……こんなにノンビリするのも二年振りか……」

「ねね……」

コイツ……いやコイツの連れの生き物……色々聞きたい事もあるがもういい。しかし何故この生き物は出会った時から俺の頭の上で巣をこさえて居るんだ？ もう慣れて来たが……

この転入生が教室に入ってから一時限後、突如この生物が乱入してきた。教室中飛び跳ねて室内の生徒達に引っ付いては飛び跳ね……引っ付いては……最終的にはナゼか俺の頭の上に納まった。前の席のコイツには『すまねえ、旦那……！』と気の無い謝罪を受けたが。

さらに、この生物、授業中は大人しく俺かコイツの頭や肩に渦くまってはいるが、休み時間になると……連中にとつても教室のマスコット扱いになったし……そこで俺は何気なくこの生物の行動を観察し、ある法則を発見した……その結果は黙して語らず、永遠に封印する事とする。この教室の女子を敵に廻してまで真実を語る事はあるまい……

「ねね……」

そして俺、折木奉太郎……まあ俺の事はもういい……面倒だ……何せ俺のモツ

トーは『やらなくていい事はやらない。やらなくてはいけない事は手短かに』だから  
な・・・

## 第2話

「んー……今日の陽ざしも心地いい……」

「おう……頭が顎から溶けそうな勢いだしな。益子の旦那……」  
「ねー……」

とある日の昼食時、前の席のコイツは俺に正面を向けて机の上に顎を乗せて伏せている……

購買のサンドウィッチと野菜ジュースも俺の机に乗せて。ここ数日はこんな感じだ。今日の俺の昼食は行きのコンビニで購入したカレーパンにシリアル、すっかり温くなったヨーグルト飲料だ。

そして隣りには……席をくっ付けてニコニコと手製の弁当を食す千反田の笑顔……  
「ウフフっ！ 薫さんはいつも気持ち良く寛いで居りますね！ 何か秘訣でもお有りなんでしょうか？」

「まあ、益子サンは授業中でも許されてるんだろ。先生も何も言わないし。やはり任務

の方が重視されてて授業は疎かになっても構わない、という事だよな、旦那」

「おう……オレはこの学校では特別待遇だしな……ただここで寝泊りして、適当に授業受けて、HRの後は放課後TEA TIME……こんな高校生活、オレの人生最初で最後かもな……」

この益子の旦那の普段の生活というものを俺達は想像することが出来ない。元々ここいら一帯で刀使と云う職種の女子を拝むこともこれまで滅多に無かったのだ。だからこの益子の旦那との付き合い方も今一つ掴みにくい。そして、何でこの高校に居を構えているのかも。だが……

「コレ……食っていいぞ……オレ食欲ないしな」

「おつ、いいのか？　じゃあ遠慮な……」

俺に対してはお互い捌けた態度を取れてきたか。ここはひとつ好意に甘えて……

「駄目です！　薫さん、昼食はきちんと食べましょう！　決められた時間に食事を取る事で食べ物 が正しく自分の身体の血となり肉となり……！」

「おい……わかった……旦那、ほら、ちゃんと食べ……！」

「おお……昼飯抜くだけでこんな大弁舌を聞かされるとは……！　流石民間校は違う！　なあ、旦那！」

それは違う……この千反田と云うのも少しばかり……て事だが、千反田は千反田で

すんなり教室に馴染んでいるしな。

「フフツ、二人とも旦那旦那って！ あ！ 私のこと旦那って呼んで下さい！ 三人揃って旦那って、何か楽しそうですよ？ うふふ！」

「こういう奴だ…… ここまでくればもう何も申し上げる事は無い。人徳の為せる技だ……」

「……おお！ HRも終わりか！ さあ行くぞ我が部室へ!!」

「いま起きたとこじや無いか……？」

「そうですね、よくお休みしましたよ？」

コイツの活動は放課後に始まる。この教室から少なからず離れた所にある地学準備室、それが俺たち古典部の部室だ。またもウキウキしながら歩いてるな…… 選択授業や体育の時はダラ〜と移動してるのに、ここへの距離には苦にならないらしい。

「益子の旦那さん？ 今日頂き物のチョコレートですよ！ 一箱持つて来ましたから

目一杯お食べ下さいね！」

「おお……マジか……！ 飲むものと云つたらやつぱり!!」

「ハイ！ 紅茶です！ 部室に着いたら早速お淹れしますね」

「おー!! チタンダの旦那！ 恩に着るぜ!!」「ねねー!!」

……ここんどここの繰り返し。まあこの旦那が来る前からそうなんだが……千反田のダンナがああ的好奇心を發揮しなければな。今の所ああ病気も小康状態だし、里志の奴も千反田を焚き付けなければ俺の日常も日々是安泰だ。よし！このままこの安寧の生活を保つぞ……！

「あれ？ 鍵が……アラ!? 摩耶花さん！ 福部さんも！」

「うす、先に入ってたのか。ん？ どうやって？」

「ああ、ホータロー、千反田さん、益子さん、お先だよ！」

「チーちゃんゴメン！ 私たちの方が先に終わつたみたいで、職員室から鍵借りてきちゃつた！」

「あらあら？ でも私の持つてるこの鍵、この資料室のですよ？ ん??！」

「ああ、たぶん摩耶花の持つてきたのはマスターキーだよ。そういうえば、ほら、ホータロー、

思い出さないかい？ 僕たちが初めて千反田さんと出逢つたのもたしか……」

「おう、そうだったな。あれからもう一年も経つのか」

「え？ ふくちゃん何の話？」

「そうです！ 一年前の私にいったい何があつたんです!? わたし……気になります

!!

「……どうだ、千反田というのはこういう奴だ。益子の旦那」

「まあ、よくは分からんが、そうか……成る程……ククッ！」

「ん?」

何気なく話を益子の旦那に振ったところ……ツボに嵌ったようだな。コイツと俺はどういう訳かその辺のところであつて気が合うらしい。余計な事にはエネルギーを消耗させないところも。

「それはそうと、千反田さん！ これ見て！」

「ちよつ、ふくちゃん!!」

「なんです？ えーと、これは……誰です??」

「おい……お前ら……何でこんなもん持つてんだ？」

「ねね？」

里志の手に持つていた物……雑誌か？

「こいつは刀剣類管理局の機関紙じゃないか。なんで伊原の旦那が持つてんだ？」

「こいつは伍箇伝校に通う生徒の実家にしか届かないモンだぞ」

「マーちゃん旦那つて……これは知り合いから借りたもので……読んじゃダメだつ

た……?」

「別に悪くはないが、ちよつと以外だったからな。ん? その写真……」

へへっ! 旦那も好きだねえ〜!」

「えっ…… あっ!! もくやめてっ! 旦那って!! それにこれは……」

そうよ、悪いっ!! わたし!! こーゆうの大好きなのよ〜っ!! もう!!

ふくちゃんのバカっ!!」

おお、伊原のこの身の置き所のない態度! 滅多に観られるものじゃない……! !

日頃の恨みだ、とくと拝見することしよう。

「で? どちら様なんです? この写真の方??」

「このお方は誰だろう! 刀剣類管理局に所属する全国の刀使の中で! たった数人しか抜擢されていないという! 特別祭祀機動隊の前衛を司る超エリート集団の中の一

人! 特別遊撃隊第一席!

獅童真希! 様! で在らせられますぞ! 控えよろ〜!!」

「ねね〜!!」

「わかったからもくやめてっ!! ふくちゃんっ!! 恥ずかし〜っ!!」

ああ、顔を伏せてしゃがんで…… 里志、少しやり過ぎだぞ……

「わあ! 素敵な殿方ですねー! ひよつとして、益子の旦那さんのお知り合いでは?」

「えっそうなの!! マーちゃん! ホント?!? じゃじゃじゃあ!!」

「どんなヒト?!? 趣味は!? 好みのタイプは?!? ねえマーちゃんつ!!」

「お、おい! お前ら落ち着けつ!! ナンか勘違いしてる様だがコイツは男じゃ無い!

オンナだ! オレ達と同類だ!!」

「ええっ、そうなんですか? 旦那さん!」

「イヤッツ!!ソコがイイんじゃないのっ!! キヤッツ!!」

「……おい…… 里志、いったい何がどういう事だ……?」

「つまり、70年代の少女コミックマニアである摩耶花にとつてはどストライクな

キャラクターってことだよ、ホータロー」

なるほど、さいで…… しかしこんなにはしゃいでる伊原というのも…… ひよつとし

て

初めてじゃないのか?」

「どうだい? ホータローも。ハイこれ! この写真だよ」

「ん、…… ほう…… 釣り合わないな……」

「ん? 僕とかい? そりゃそうさ。三次元の世界は永遠に二次元の理想には追い付か

ないもんさ」

写真も二次元に入るのか？　なんて位相物理学的……？　な問はともかく、伊原の奴め、

明日になったらもつと居た堪れなくなるぞ……　ヒヒヒ。

元ネタ

マスターキー

氷菓・アニメ第1話

## 第3話

「……うす、昨日アレからどうだった?」「ねね??」

「おう、旦那」

「おはようございます!薫さん! 摩耶花さんの事ですか? あの後二人で喫茶店に寄ってあの方のお話をたくさんしてもらいましたよ? とても素敵の方なのでね!

獅童さんて!」

「まあ、知らぬがナントカとも言おうしな……」

「ハイ?!」

「いや…… オレはコイツのこと直接には知らんしなー! ヒヒ!」

「ほーさいで、まあ、聞いた話では相当のエリートらしいしなー。益子の旦那には縁もゆかりもないか」

「おう…… そう言うことだ、折木の旦那、よく分かっているじゃないか……」

「それと折木さん、薫さん? 摩耶花さん、しばらく漫研の方での活動が多くなるそうですよ。」

『皆んなに宜しく……』だそうですね！ とくに折木さんには『……覚えておきなさいよね！』とのことですよ！ どういうことですか？？ 折木さん！』

お、おう…… またも逆恨みか…… 伊原め！ まあ憶えておけ！ というなら昨日の事を忘れないでやることもやぶさかではないが…… ウム。

「薫さんお昼を食べるようになりましたね！」

「おお、ここんとこ体調がいいんだ。メシもほら！ サンドウィッチだけじゃなく、おむすびもだ」

「ねねっ！」

「たしかによく食うようになったよな。血色もいいし、

授業もわりと起きてる時が多い気がするぞ」

「そうですね！ きつとここでの生活に慣れてきたんです！ そのうちに成績の方にも結果が出てくるかも知れませんかよ！」

「もう二週間近くにならないか？ あれから荒魂も出てこないし、

もう大丈夫なんじゃないか？」

「そうならいいんだが…… まだ油断がならないようだ。上からの指示もあるし」

「もし、ここでの任務が終了したら、長船にもどつてしまふんですか？」

私、寂しいです……」

「おう……こればかりは、オレにもどうにもならない。荒魂が多数出現すればここでの任務も長引くだろうが、そんなこと望んじやいけねえからな……」

「そうだな。益子の旦那の任務、て割に合わないお仕事だな……」

「まあな、でもこれも御刀に選ばれた重要な天職みたいなものだしな」

俺たちの昼食は時にこんなしんみりとした会話を交わすこともある。その時の益子の旦那の目は窓の外をただ眺めてボーとしている。こころここにあらざと……

「なあ、折木の旦那……旦那のこと、ほうたろう、て呼んでいいか……」

「……ん？　なんだ、別に構わんが」

「だからよ……旦那もオレのこと、カオル、て呼んでくれないか……？」

「いいぞ、何か知らんが。薫、でいいか？」

「おつ、おう……じゃ、ホウタロウ……」

「ん？」

「いや！　……何でもねえ……フウ」「ねねね??？」

「おう」

「どういう心境の変化か？ らしく無いな…… まあ、俺たちはまだコイ…… 薫に出逢ってからまだ日が浅い。何を持って『らしくない』なんて、言える権利もないわけだ。まあ、これも体調の変化のなせる…… ということなのか……」

「……だから、出る…… て話なのよ…… ! 音楽室に！」

「お、おう……」「ねねね……」

「おい、里志、あれって……」

「まあまあホータロー！ ここはひとつ、摩耶花の話の続きを聞こうじゃないか！」

「そうです！ また新しい都市伝説が生まれるところかも知れませんよ！」

学校の怪談か七不思議だろ…… まあこの神山高校にも御多分に洩れずその手の話は代々受け継がれてさらに尾ひれが付いたりまた新しいのも…… しかも伊原、そのネタは一年以上も前のだぞ。どれだけ情報が遅いというんだ。

「おい……マジか…… オレ選択授業音楽だぞ……」

「そーなのよマーちゃん！ で、グランドピアノがあつたでしょ！ ある雨の日の放課後合唱部の生徒が忘れ物を取りに音楽室に戻つたら…… 中からシヨパンの葬送進行曲

のピアノの音が聴こえてきて……扉を開けたら……」

「……お、おう……」

「ピアノの蓋がスーと開いてその中から髪を振り乱した血まみれの女子生徒が……!!」

「きゃっ……!!」

「……うわ……」

おい、千反田はともかく薫……真に受けるな……てかこの益子の旦那、ほんと真剣に……あんな荒魂を一刀両断するほどの剣の使い手がこんな程度の話に食い入るなんて……伍箇伝校の生徒といっても結構同世代には同じものかもしれない。しかしこの話の盛り方も……

「一寸一寸、ホータロー……! 一年の間にこんな風が変わるもんなんだね。でも大筋は変わらないようだけど」

「まあな。それに、お前のことだからもうこの顛末は周りに言い触らしているのかと思っただぞ」

「まさか! 僕はね、こういう謎を解き明かしたり尤もらしい説明を言い触らしたりしないでただこういう情報を収集する事に喜びを見出すタイプなんだ」

「最初のほう、俺への悪意を感じるぞ……」

「ああアレ？ ホータローの場合は自主的には動かないタイプだからね。高校に入って千反田さんと出逢って初めてホータローの潜在的な才能が開花したわけだから」

「やっぱり悪意じゃないか……それに、俺は何もそういう事をしようとした覚えはない。あれはみんな……」

「運、が良かった、て事だよ。ホータロー」

「おう、何の話だ？ ホータロー！ 福部の旦那！」

「そうです！ 折木さん？ 何か判ったんですか!? 今の話！ ぜひ折木さんの推理を訊かせて下さい！ わたし、気になります!!」

おい……久しぶりに千反田の目が……だが一年前ならともかく、こうも怪談じみた話に発展してしまうと……説明するだけ野暮つてもんじゃないのか……？

「……俺は霊能者じゃない。分野が違う」

「そうなんですか?」

「まあ折木には、この手の話はお手上げよねー!」

なんだ伊原の奴、挑発のつもりか？ そんなものに乗るつもりはない。

俺はこの一年は安寧と怠惰の高校生活を送る事をこころに決めているんだ！ この信念を覆すことは……

「薫さん！ 折木さんはですね、この高校で起きた難事件をことごとく解決に導いたと

ても凄い才能の持ち主なんですよ！」

おい！ 千反田！ 余計なことを吹き込むな！ それに難事件だと…… 他愛もない事ばかりだったじゃないか。あんな物は運がよければ誰だつて……

「そうさ、ホータローは普段こんな面倒くさそうにしてるけどいざとなつたら……ここ伝統ある古典部が誇る神山高校きつての名探偵！とは！まさにここにおわします折木奉太郎のことであります！！てね」

里志まで……面白がりやがつて！

「ほう、そうなのか？ ホータロー」

「それはこいつ等が勝手に面白がつてるだけだ。俺には関係ない！」

「でも、折木さんは……！」

「おう、あれだ！『湿布と膏薬はどこにでもくつつく』てヤツだ！

ただ巡り合わせがよかつただけだ！ 証明終了!!」

「折木……それを言うなら『理屈と膏薬』でしょ？」

「おお、そうだ！ これにてQ・E・D！ 終了だ!!」

おい……俺はもう面倒は御免だ…… それにあの千反田の目……これ以上目覚醒させる訳にはいかない……！

元ネタ

音楽室の怪談 氷菓・第1話

湿布、膏藥、理屈 第19話

## 第4話

「里志…… さっきは肝を冷やしたぞ。薫の奴に余計な事を吹き込むだけじゃない、これ以上千反田の好奇心をだな……」

「そう言うなよホータロー、僕だって久しぶりにホータローの名調子を拝みたくなくなってきたところさ。ただその対象がなかなか転がっていかないんだよねー」

「そんなもん、そうそう転がってたまるか。つたく」

古典部の活動を終えて今は里志と二人で帰宅中。今日のコイツの言動に愚痴のいくつかは零したくなるというものだ。

「でも以外だったよね、益子さんがあんな怪談話に怯えてるなんて！ あの荒魂相手にも怯まないほどの豪胆さなのに」

「そうだな、現実に目に見える化け物よりも、いるかないか分からないもののほうが得

体の知れない怖ろしきを感じるのかも知れんしな」

「まあ僕としてはその目に見える化け物のほうがよほど恐いんだけどね」

「もうここんとこ荒魂の大発生のニュースも聞かないよな。去年から今年の始めぐらいは関東の方でのニュースでは聞かない日はなかったのに」

「その代わりここ神山地区周辺でも三つほどポツリポツリ、だよな。全国に分散、という事だよ、ホータロー」

「いい迷惑だよな。でも、それを末端の刀使に押し付ける、てのもな」

「益子さんのことだろ？ 僕たちと同じ年なのに… 酷だよな」

「昨年、鎌倉、東京での騒動で刀剣類管理局への批判はまだまだ根強い。それでも現場で剣を振るう刀使の子達に対してはむしろ同情のほうが上回っている。俺達と同年代の女子生徒が命懸けであの化け物と戦っているんだ。だから彼女達の負担を減らすため地方へ分祀する、という方針は曲りなりともノ口を祀る地元の理解を得てはいるはずだ。しかしながら…」

「少なくとも荒魂が発生した時点で位置を公表してくれたらな…」

「台風の進路予報みたいだね。でも荒魂はどちらかっていうと地震に近い方かな。突然だからね」

「どちらとも天災だな… なあ里志、お前のケータイの例のアプリ、荒魂の感知機能、て

付いていないのか？」

「ホータローはスマホはおろか普通の携帯も持っていないからね。去年の講習会の内容もうる覚えなんじゃない？」

「ああそうだ。必要ないと思つて聞き流してた」

去年の秋ごろ、荒魂に遭遇した際の対処法の講義で現役の刀使二人が俺等の高校に向いて来て講習会を体育館で開いたことがあつた。主にスマートフォンに載せる『例の』アプリの使用法の説明だ。全国の小中高を持ち回りで行っているらしい。鎌倉での事故がきっかけとも言われているが。

「パソコンでもアプリの追加は可能なんだけどね。それにせつかく美濃関から刀使の子達が来てくれてたのに。可愛い子だったのになく！」

「うるさい……で、付いてるのかその機能」

「残念ながら、かな。このアプリは通報と警報、あと発生を確認された後の位置情報の表示ぐらいだね。避難のための。直接荒魂を感知することは出来ないみたいなんだ」

「じゃあ前に薫が見せてくれたあのスペクトルなんとかつていう端末とは……」

薫が伊原の奴と連絡先の交換をする際取り出した端末だが……一見して普通のスマホの様な見えたが千反田の好奇心に押されて説明を余儀なくされてたな。アノ目は俺だけではなく薫にも適応可能だったわけだ……

「あれとはね…… あれは刀剣類管理局から刀使達や関係者だけに配備される特別品ということだったよね。本来、僕たち一般人がおいそれと拝める物でもないはずなんだ。益子さん、気がいいんだね」

「なるほど。あれなら直接荒魂を感知できるというわけか。でもその前は どうして たんだ？ スマホなんてここ十年かそこらの技術だろう」

「携帯そのものがまだ二十年ぐらいだしね。それ以前の刀使は確か……」

そう、これを使って荒魂を確認してたらしいよ」

「ん？」

里志のスマホの画面に映っているのは…… 方位磁針？ でも真ん中でオレンジ色に

光っているのは……

「そう、この半円形の硝子ケースの中にあるノロの動きで荒魂を感知していたそうなんだ」

「…… ノロ!? これ、ノロを使っているのか!？」

なんて直接的な…… でも何でまたノロを…… ?

「さあ僕にはね。たぶんノロはノロ同士、引きつけ合う性質でもあるんじゃないかな。荒魂も元はノロなんだし」

さいですか…… どちらにせよ、俺達には縁のない技術だな。荒魂が発生したらただ

一目散に逃げる！ というのが俺たち庶民の知恵つてもんなのか……

『本棟二階の東側通路で革製の茶色で折畳みの小物入れを落とした心当たりのある者は職員室の〇〇が預っている。至急受け取りに来なさい。繰り返す……』

「折木さん、何かきな臭いですよ？ 前にもこの様な事がありましたか？」

「始まってしまった…… おい〇〇！ 何て放送を……！ しかし去年のアノ時とは…… いや、千反田の目はまだそこまでいっていない。ここは穩便に……」

「ただの落し物だろう。この五人の中にそういった物を落とした奴でもいるのか？ いないなら俺たちには関係ない」

「ねえチーちゃん？ 前にも、て？」

「そうだねホータロー、ここはひとつ説明してもらわないと」

「お、何の事だ？ 何か事件の匂いでもするのか？ チタンダの旦那！」

「ねね？」

薫まで…… おいみんな、空気を読め。このままでは千反田が…… いや、里志の奴め、明らかに火中の栗を俺に拾わせようとしているな？ それなら……

「千反田…… お前は今の校内放送の内容に違和感があつて俺に訊ねたんだろ？ それなら…… なあ里志、たまにはお前が推論を出してみないか？ 今の放送内容」

「え、僕がかい？」

「わあ！ 福部さんですか？ ぜひ!!」

「ふーん、折木、あんたじや手に負えないわけ？ ふん！」

「何か知らんが、推理か!? 高校生探偵か!! おお、お手並み拝見といこうぜ福部の旦那!!」「ねね!!」

ふう…… たまには俺を焚きつけるだけじゃない、千反田のアノ目の恐ろしさをとくと思ひ知るがいい。

「福部さん！ わたし、あの放送の内容に違和感を覚えるんです……！ でもその違和感が何なのかわたしには分からないんです！ どうか、わたしに納得できるようにわたしに説明して下さい!!」

わたし、気になります!!」

「……え、えーと……」

ふん! いい気味だ、ついでにいい機会だからこれまでの己れの身の振り方を顧みることがいいさ。

「凄えな…… チタンダの旦那…… 確かにあの目に捕まったらオレも逃げられはしねえ……」

おおここにも千反田被害者の会の会員が。そして里志も入れてこれで三人だな。

「えーと、そうだね、まずは…… んー…… 放送内容が……」

「内容なら! ハイ!!」

「おい、今書き上げたのか? なんていう記憶力だ……」

「流石チーちゃんね!」

「里志、これで困らないよな……」

「は…… まずはその小物入れだね。でも革の折畳み、て巾着か何かなのかな……」

「ふくちゃん…… 袋状のを真ん中で縛ったって折畳みとは言わないんじゃない？」

「袋状で折畳み…… おお、竹刀袋ってのはどーだ!!」

「マーちゃん、小物入れ、てことだけど……」

おい…… 色はともかく革製で折畳みっていつたらアレしか無いだろう…… 里志め、日頃ご自慢の脳内データベースはどうした？ まあ、普通アレを小物入れとは言わんがな……

「そうですね、お化粧ポーチというのはどうでしょう！ この高校ではお化粧は原則禁止ですからね！」

「うん、そうだね。どういう物か想像もつかないけど…… 学校に持込み禁止の物を先生が拾ったらお説教のため職員室に、てことはありそうだし、これなら小物入れ程度でも放送で呼び出すのは不自然じゃないよね」

「そういうことだ。これで万事解決、また俺たちに平穏な日々が戻ってきたという事だ！ めでたしメデタシ！」

「なんだ、呆気ないな……」「ねね」

「……でも、まだ何か納得できません…… わたしの中の違和感が払拭出来ないんです」  
おい千反田！…… 自分から質問して勝手に解決を提示しておいて、それは無いだろう……！

「そうなのか？ 旦那？」

「こうなったら、もうホータローの出番だね。観念しなよ！ ホータロー!!」

冗談じゃ無い！ と言ったところで…… もう当たりは付けているんだがな……

「どうです!?! 折木さん！ 何かお気付きになる事は……！ わたし、気になり……」

元ネタ

校内放送

第19話

## 第5話

「はあ…… わかった。その千反田の違和感というのは去年の十一月のあのゲームの事だろう。あの時は俺と二人だったからな」

「さっき言ってた『前にも』のことだね。それじゃ僕にはお手上げだよ千反田さん」

そこで他三人に事の次第を手短に説明した。労力も最小限に……

「そういえばあの頃に『その』ニュースが飛び交ってたね。たった一回の校内放送でホータローが解決したのかい!？」

「ふーん…… チーちゃんがそう言うなら…… 折木やるじゃない」

「俺は別に当局に協力したわけじゃ無い…… ! たまたまその日に千反田に披露した俺の推論が次の日に証明されただけだ!」

「でもよ、もしこの推論を前持って地元のお偉方に吹き込んでいたら…… 東京米花市の某高校生探偵と肩を並べるほどの有名人になってたんじゃねーかホータロー!」

「冗談じゃ無い! おちおち授業中に居眠りも出来なくなるわ…… !」

「つまり、どういうことですか? 折木さん??」

千反田…… オマエというヤツは…… お前のその違和感というものを払拭するため

に去年の事まで持ち出したんだろうが……！」

「つまり、お前の違和感というのは…… たぶん金だ」

「お金、ですか……？ まさか！ また……！」

「いや、もうそれは無いだろう。つまり、お前の違和感は、記憶の中にあるあの時の情報と今回の放送内容に類似点があったということだ。それに、放送中の『心当たりのある者は』という下りだな」

「…… ハイ!! そうです！ それでした！ これでスッキリしました！ ありがとう

ございます折木さん!!」

「ちよ、ちよつと待ってチーちゃん！ 私たち全然わかんない！ どういう事！ 折木

!!」

俺だつて…… こんな事で当人に納得されても…… それにコイツは瞬時の記憶力はあつても持続はしないということだな。やはり千反田は宇宙人だ……」

「千反田…… あとはお前が説明しろ。スッキリしたんだろ？」

「わたしがですか……！ ハイ！ 皆さんを巻き込んでしまったのでここでお詫び替りにお披露目したいと思います！」

「千反田さんまつてました!!」

「ふくちゃん！」

「じゃあ、改めてお手並み拝見だな」「ねねー!」

「では! まず、その小物入れというのは、お財布です!」

「へ!? そうなのかい千反田さん! ホータローも...!」

「ああ、たぶんな」

「わたしも折木さんにお金と言われるまで気がつきませんでした! でもそう言われるとその小物入れがお財布以外考えられなくなっただんです」

「まあそうよね... でも何で放送では小物入れ、て? お財布じゃ駄目だったの?」

「たぶんです、そのお財布の中にはお金が入っていたんです! それも大金が!」

「確かに、お金の入った財布を落し物コーナーに置いとく、てわけにはいかないからね。でも放送でも金額を提示しなければ...」

「おそらく、千反田の言いたいの... その財布を拾ったのは先生で、しかも高校生にはそぐわない程の札束が入っていた。あわてた教師が財布、というところをあえて小物入れ、と放送したのは動揺してたのと他の生徒たちにこの事を知られないためにだ。もし正直に金額まで放送したら... だな」

「どうなるんだホータロー?」

「職員室の門前に市が建つほどの賑わいをみせるからだ...」

「野次馬ね... あるいは自分のだとも言い張ったりして... なる程ね折木」

「でも名前で呼び出せば……て、身分証明になるものは財布の中に入れてなかった、て事だね千反田さん、ホータロー」

「ああ、さして事件性も無いだろう。言つとくがこれは仮説だ。真に受けるものでも無い」

「でも折木さん、わたしは納得できましたよ？　これで今晚悩まされずに熟睡できます！」

「まったくコイツは……また無駄な労力を消費しちまつたじゃないか……！」

「なるほど、こういうものか……ウム」「ねね！」

「でも、大金でどのくらいなのでしょう？　折木さんは札束と言いましたよね！　きつと、千円札が五枚ぐらい……五千円でしょうか?!」

「えー……と、まあそれぐらいよね……ふくちゃん」

「うん……そうだね、摩耶花のいうとおりさ……」

「お、おう……一般の高校生の金銭感覚というのはそのぐらいが普通なのか……！」  
……千反田家の家庭環境というのは相当手堅いことが判明した。代々地元の名家を続けていられるわけだ……

「なあ、あれからアノ一件の話の続き、聞かないか？」

「アノ一件、てこの前の校内放送の事かい？ 益子さん」

「おう、あの推理、当たっているのか気になってな……」

「僕の周りではね。手芸部や総務委員会でも話は聞かないな。谷君、てヒトに聞いても『そんな放送あったか？』て反応だしね」

「ふーん、漫研でもそう。そんな事あったかなんて誰も気付いてないみたい」

「そんなモンだろ、だいたいあんな放送に食い付くなんて当の本人か千反田ぐらいだ」

「でも、薫さんの気持ちもわかります！ あの事件の証明がなされないまま、というのもどかしいものです」

「事件って程では無いだろう…… それにお前はあの時スッキリした、て言ってたじゃないか」

「でも、わたしも推理してみたんです！ 結果がわからないのは…… わたし、気に……」

「おう、それなら簡単だ。○○のとこへ行けば……」

ん？ なにをムー！ とした顔を晒してるんだ千反田…… 俺はお前にとぼつちりを

受ける筋合いなど無い！」

「そうだね、結果がわからない、てそういうもんだよ。じゃ、ここは一つ、ゲームをしてみないかい？ 予め答えのあるゲームを。それなら……」

「却下。ここは何の部活だ？ 本を読むところだろう。部活動以外の活動は原則禁止！  
以上！」

「折木…… あんたいつから部長になったってわけ？ ここはチーちゃんの意見が……」

「わあ！ 面白そうですな福部さん！ 早速始めましょう！」

「折木…… 部長命令よ。フフツ！」

「おう、ゲーム開始か！」「ねねっ！」

また面倒な事を……でも今回はあの千反田の叔父の話の時のように全員参加か？

なら面倒も五分の……

「そうだな…… オレが言い出しつぺみたいなものだからな…… どうだ！ オレがお題を出すというのは……！」

おい！ 薫め！ 逃げたのか……？ これで面倒は四分の一になるじゃないか……

！

「僕は構わないよ。みんなは？」

「私も。折木…… あんたも参加させていいんだけど？」

お、俺はべつに参加させられなくたって…… まあそう無理に、ということなら遠慮なく見送りに……

「折木さんも参加ですよね！ では薫さん！ お題をお願いします!!」

「おう！ それじゃあな、んく……」

結局強制参加か…… 千反田め、俺にズラかる隙も与えないとは……！

「……そうだな、オレがここにいる理由…… てのはどうだ……？」

「薫さんが、ですか……？」

「益子さん、それは……」

「前に任務で強制的に、て言っただけじゃなかった……？ マーちゃん」

「つまり、答えは出てるじゃないか。はい！ これにて……」

「いや、それは上からのお達しだからな…… オレは直接は知らん。だからお前らの推理を聞きたいんだ。どうだ？」

「それって、答えは用意されてない、て事だよな……」

「うん…… それじゃゲームには……」

「でも、去年の十一月のあの事件の時も答えはありませんでしたよ？ たまたま次の日に真相が明らかになりましたけど」

つまり、あの時はもどかしさを感じる時間が短く済んだ、てことか。しかしな千反田、

薫のお題を解いてみたところでそれを確認するには刀剣類管理局まで出向かなければならないんだぞ！ しかもそれが機密事項だったら… お前は一生寝不足の人生を送ることになるんだが… それでもいいのか？

「まあ… オレが納得できればそれで終了！ これならどうだ？」

「いいですね！ わたしも薫さんがここに住む理由を知りたかったんです！ どうでしょう皆さん！」

「まあ、チーちゃんがそう言うなら…」

「僕も構わないよ。そもそもゲーム、て言ったのは僕だしね」

「俺は…」

「決まりですね！ では、誰からいきましよう!!」

「またしても… もうこうなったら断る方が面倒だ… ここは早々に切り上げて…」

元ネタ

『去年の十一月』『前にも』『その』 第19話

アニメ版の第19話のネタバレになってしまっているのでこの辺の固有名詞は曖昧にさせて頂きます。ちなみにこの19話の題は『心あたりのある者は』です。

谷君

第12〜17話

## 第6話

「おう、じゃ、俺からだ。いいな？」

「駄目です！ 折木さんは最後です！ 最後に皆さんの答えを纏めて……です！ 前もそうでしたよね？」

「異議なし！」

「そうね、悔しいけどあんたが一番正解率が高いんだし」

「おお、やはり真打は一番最後か……頼むぜホウタロウの旦那！」

一番最初に適当に馴らしてからそのまま途中で……という俺の計画が……おのれ千反田め！ どこまでも俺の人生灰色計画を邪魔しにくるとは……！

「それではですね、わたくしからまいります！ 薫さんがここに来た理由、一つにはこの地域での巡回、これは今までもあつた恒例行事みたいなものですからね。それで長船での指示に従つてこの辺りの荒魂を監視していたんです！ もう一つの説は……武者修

行です！」

「へ……千反田サン？ それ本気なの??」

「もちろんです!! 薫さんは学校での慣習で長船から独り武者修行の旅に出て荒魂を鎮めることを命じられていたのです! そしてここ神山に訪れたときまたまたわたし達の学校に荒魂が現れたのでこれを鎮めて下さったのです! それを恩義に感じた校長先生が一宿一飯の宿としてこの校舎での寝泊まりを認めたんです! もちろん長船の方にも連絡は通してですよ?」

千反田……オマエという奴は……

「つまりね……マーちゃんが知らなかった、ていうのは一宿一飯の恩義、ということ?

チーちゃん……?」

「あ、そういうことになりますね! きつと薫さんはここにとどめ置かれてる理由を知らされないままこの学校に宿泊しているんです! どうです? 薫さん!」

「おお! そうだったのか……道理でここの待遇がいいわけだ……なにせ三食昼間付きだからな! 昼も購買部に行かなくて済むし」

「ちよつと待て……じゃお前がいつも食べているあのサンドイッチは……」

「ああ、購買部からの横流しだ。特別に分けてもらっている」

なん……だと……!? 俺はあの購買部の混雑に嫌気が差しているからわざわざ行

きのコンビニで割高の昼食を購入しているというのに……！　この世界での暗部を見てしまった思いだ……

「残念だけど千反田さん、それは無いと思うよ？」

「あら、そうですか??」

「いくらそんな理由でも校内で宿泊とはね……校長の一存で決められるものでもないだろうし。でも実際校内で宿泊まりしているんだけどね、益子さんは」

「どこで寝泊まりしているの？　マーちゃん」

「ああ、この特別棟の一階、西側の階段の下の部屋だ。元は物置だったんじゃないか？」

「まあ、もともとこの学校には宿泊施設なんて無かったからな。急拵えとはいえそれに準備をしていたんだらう。それに武者修行というのは……千反田、想像力があらぬ方向に向き過ぎだぞ……！」

「そうなんですか??　薫さん？」

「武者修行、てのは無しだチタンダの旦那！　オレも笑いを堪えるのは得意な方じゃないからな！　ヒヒっ！」

「何か……昔話みたいね……　チーちゃんのとて……」

皆んな堪えている、というより呆れているんだが……　まあ千反田の発想がやはり説話向け、ていうのが判ったが。

「じゃあ、次は私ね。マーちゃんがこの学校にいる理由……そうね、やつぱり……荒魂狩りかしら……！」

「……なんだい？ それ、摩耶花……」

「荒魂狩りですか？ それは薫さんの本来の任務のほうでは……？」

「……そうじゃ無いのよチーちゃん……！ 実はマーちゃんは……『必殺荒魂狩り人』なのよ!!」

「おい伊原……ちゃんと順を追って説明しろ」

「わかったわよ……実はね、マーちゃんは昼間あんなに眠そうにしているけど……は……夜みんなが寝静まった後、独り夜陰に乗じてこの一帯を探索し、未だ完全に形成されていない荒魂を発見次第……闇から闇へと葬り去っているのよ……だから！ あれ以来荒魂が白昼に現れる事が無いのよ！ そうよねマーちゃん!!」

お、おう……確かに……あれからここ三週間ほどこの地域で荒魂が発生した、という話は聞かないが……しかし伊原の奴め、また古いネタを……

「お、おう……つまりはオレはあの『ムコ殿』の如く昼行灯を決め込んでいるが……しかしその実態は！ てどこか……？ で、オレに知らされていない事実、てのは？」

伊原の旦那

「ええとふくちゃん……何だったったかしらこのお題って……」

勝手に暴走して勝手に自滅か…… まあ伊原らしいが。

「まあまあ摩耶花の発想もなかなか面白かったけど、飛ばし過ぎたみたいだね……」

「イヤ〜っ!!もう恥ずかし〜っ!! ……オレキ〜!!」

何でまた俺に…… いや俺は悪くない! 千反田が悪い!!

「実際のところどうなんですか!? 摩耶花さんの言うとおり……!」

「…… まあ、後の二人の意見を聞いてからにしようじゃないか、チタンダの旦那」

「じゃっ! 僕の番だね! 僕の推測では…… テストケースかな?」

「なによ…… そのテスト、て……」

「ん? つまりさ、これから刀使の子達が地方に派遣されるだろ? だからその地域の

受け入れ態勢の確認、あるいはモデルを創りだすためじゃないのかな、て」

「なるほどです! これまで刀使の方々はこの辺りに在住されていませんでした! で

すから薫さんをここに派遣して、て事ですね!」

「たぶんここ以外にもそういう事をしている学校はあると思うよ。あるいは地域一帯で。交番みたいに刀使の子を交代で駐在させるとか。でも、刀使の任務と学業を両立させるためには学校での宿泊が一番現実的かな? と思つてね」

「おお、確かに…… あり得ることだぞ……! 上の方は何を考えているか分からんが…… だったら、校内の照明、何とかならんかな……!」

「どういふことですか?」

「学校の校舎つてのは……恐ろしいもんだぞ……夜中は……! これなら学校の怪談だの七不思議だの! ……あり得るとさえ思えちまう……」

「夜中に校舎を……なの? マーちゃん」

「ああ……用を足す時とかさ……オレのいる長船つてところは学校としてだけじゃない、荒魂発生時の司令塔としても機能してるから二十四時間いつも関係者が詰めていんだ……生徒も交代で待機してるからな……」

「これもまた現実的だな……あの程度の怪談話で怯えていた、てのはそんな理由からか……」

「里志のがこれまでの推測の中で一番まともだったな」

「なによ……悪かったわね!!」

「わたしのは……そんなに可笑しかったですか??」

千反田……あれでウケを狙ってなかったとしたら、むしろ大したモンだぞ。今年の文集のネタはそれで決めとけ……!」

「もうこれで結論が出ただろう……里志の案が一番現実的だったし薫も納得している。もおいんじゃないのか……」

「そうね、私も折木の推測を聞く手間も省けるし、丁度いいじゃない」

「でも、僕の推測というのは推理、というほどじゃ無いよ。現実的に考えて、て事だから」

「じゃあふくちゃん、推測と推理の違いって?」

「はは……僕にもよく分からないけどね。でもこれだけは言える、僕の説明は推理じゃ無いってね。それに、データベースは……」

「結論を出せない、て……ふくちゃん謙遜しすぎなんだから……」

「そうですか……では折木さんなんでしょう? 折木さんの説明なら推理、になるのでしょうか?」

「俺は……もういいだろう。推理だろうが推測だろうが現実的な説明で皆が納得するなら……」

「そう、もう切り上げてはよ帰りたい……」

「……いや、ホウタロウ……お前の意見を聞きたい」

「意見なら……里志の説明で十分、て意見だが……」

「そうじゃない。お前の『推理』が聞きたいんだ、ホウタロウ……」

ん……? 薫の目……前の三人の時とは違つてずいぶん真剣だな……

「そうだね、やはり最後はホータローの『推理』で締めなくっちゃ!」

「まあ、ふくちゃんがそう言うなら……つき合つてあげるわよ。折木」

「そうですね！ 折木さんはいつも意外なところから事件を解決してきたじゃないですか！ 今回はゲームでも……折木さんの『推理』が聞きたいんです!! わたし……気に  
なります!!」

## 第7話

はあ……. またも身を乗り出してのPS無視のどアップ……. 千反田、いつもの事ながら近寄りすぎだぞ……. !

「……. わかった。じゃあ俺の『意見』を述べるぞ……. 言つとくが、これは『推理』なんてものじゃ無い、妄想に近いものだ。膏藥の上に湿布を貼り付けるぐらい無駄な話かもしれないんだぞ。それでもいいのか？」

「ああ、構わない」

「OK! ホータロー!」

「まあ、その妄想につき合っただけであげるわ」

「では、早速! どうぞ!!」

「では、……里志、この前の帰り道の話、思い出せるか？」

「この前って？ ……ああ、この話の流れでいくと『例の』アプリのことだね」

「なによ、そのアプリって……折木、話の腰を折るのも……」

「いや摩耶花、そのアプリというのは去年この学校で講習会をやった荒魂対策のアプリのことだよ」

「何で今そんな話を……」

「俺もあれから興味を持って関連するサイトを開いてみたんだ。特に荒魂発生の位置情報をな。今年の四月から今頃にかけてどれだけの荒魂が全国で発生したかをサイト内のマップで検索していたんだ。今年の初め頃に比べたら確かに関東の荒魂の発生件数は減っている。その代わり地方に分散したこともな。そして、ここの神山地区……」

「うん、今年に入って三件だね、ホータロー」

「より正確には四月に入ってからだ。しかしだ、全国規模の地図情報ではここ神山地区は一つのマークしか表示されていない」

「どういうことです？ 折木さん」

「そこで神山地区を拡大して改めて確認した……ここ神山地区での三体の荒魂はかな

り近い間隔で発生している事をだ」

「つまりなによ……」

「つまり近過ぎて遠くからだとか一カ所と変わらない、という事だ。そこで全国の他の場所と同じような発生地区を検索してみたが……」

「他には無かったのかい？」

「ああ、ここ神山区区だけだ。つまりここだけ密集して荒魂が発生しているんだ。素人の俺でもさすがにおかしいと思った。さらに位置を確認してみると……」

「どうした、ホウタロウ」

「荒魂が鎮圧された位置しか表示されていないが、明らかにこの高校に近付いてきている……」

「本当かい！ …… えっと…… これ！ 確かに!!」

里志め…… 流石反応が速い…… スマホですぐ検索しやがった。

「一体ごと…… 確かに鎮圧された場所は違うけど日が近づくにつれ荒魂も……」

「じゃあ……あの時の、グラウンドのあれって……偶然じゃ無いわけ？ 折木……」  
「本当なんですか……でもなんで……」

「理由は後だ。注意深く観れば俺でも気付く異常事態だ。上の方……つまり刀剣類管理局ならとつくに気付いていることだろう。そこで、調査隊をここへ派遣した……」

「それがオレだ、て言いたいのか？ ホウタロウ」

「いや、それはまだ置いておく。それにこれは秘密裏に活動しなければならなかった。おおつぴらになつたらこの辺りは大混乱だからな。荒魂の出現はあくまで偶然であることを装わなければならない。まだ二件めの時のことだ。しかし……」

「このグラウンドに現れたわけだね。三週間前に」

「そこで、止むを得ず『たまたま』通りかかった武者修行中のとあるお方に鎮圧して頂いた、ということだ」

「ちよ！ オレキ〜!!」

「それがこちらの……」

「千反田、これは俺の妄想だ。真に受けることは無い。今のところはな……」

「……面白いじゃないか、続けてくれ……」

「そこでこの事に感じ入った我が高校の校長先生様が是非御礼にと、この御仁をこの校舎の宿泊場所へと案内した……」

「それがあの物置、てわけ？」

「この御仁も改めて恩義を感じたんだろう、泊めてもらう替わりに用心棒を買って出ることにした。それでこの辺りの荒魂の出現がパツタリと止むことになったとき！めでたしめでたシ！」

「アンタねくつ!!」

「妄想だからな……ただ、もつと妄想を逞しくすると、さらにこんな事実が判明した。この用心棒、表向きは猫を被つてはいるが、実は……夜な夜な校内を徘徊し教室を物色しているという……」

「ええ！ そうなんですか!? 薫さん!!」

「おい千反田……これはゲームだ……当の本人には関係の無い話だ。よな？ 薫」

「おう……そうだな……」

「つまり、この学校の校舎には誰にも知られていないあるお宝が隠されていた。この用心棒は、偶然を装いながらまんまとこの校舎に宿泊し、夜中になったら宝探しを始める、そんな生活を送ってきたわけだ。そして今に至る、そういうことだ。どうだ？ 薫の旦那……いや、刀剣類管理局並びに特別祭祀機動隊所属『特別遊撃隊』隊員！ 益子薫殿！」

「……今なんて……おい、ホータロー!!」

「チョット!! なに言ってるのよっ!! 折木!! アンタ気は確かか!」

「えっと……つまりはどういうことです……? 折木さん……?」

「言っただろ、これは妄想だって。ゲームだったな。あとはこの薫の旦那が納得するかどうかだ……」

「……見事だ、ホウタロウ。流石オレの見込んだだけのことはある……」

「え……嘘でしょ？ 冗談よね……折木の話に面白がつて乗っているだけよねマーちゃん!!」

「冗談ではないのかい？ 益子さん……じゃあホータローの言つてたことも……」

「ああ、面白可笑しくデフォルメしているが大筋は正解だ。大したモンだけ折木の旦那!!」

「じゃ、デフォルメ無しで真面目に説明してもいいのか？ 薫」

「ああ……もうこうなつたら構わん。だが、ここだけの話だ……」

「わかつた……真面目に説明すると、この薫は岡山の長船からじゃ無い、鎌倉の特別祭祀機動隊から……面倒だから鎌倉としとくが……直接ここに派遣された鎌倉直属のエリートということだ」

「でも何で！……特別遊撃隊の隊員、て分かつたのよ……」

「簡単だ。この前、伊原が身悶えてたあの機関紙があるだろ、あの写真の中に一枚薫らしい姿が写っていた」

「なによそれ……でも機関紙はここに……」

「ありますよ！ この準備室に！ このまえ摩耶花さんがわたしに貸して下さいましたから！」

「……これね、写真は掲載されてるけど……どの写真なのよ！」

「……これだ。これは今年の春の刀使の全国大会の写真だな、剣術の。ここにアップにされてるのは誰あろうあの獅童真希様だが……この写真では無く、このページ……大会の優勝者が写っているこの写真のその背後……大勢の観客に混って体格に不釣り合いな刀を背負っている刀使が……小さいが写っているだろう、後姿だが……そしてその制服がこの獅童真希様と同じ色とデザイン。そして遊撃隊員の名前はこの機関紙では第一席、第二席しか載せていない」

「こんなに小さく……それでマーちゃんも遊撃隊隊員、て……話が拡大解釈しすぎじゃない？」

「まあ言うだけタダだからな……当人も認めた訳だし、運がよかったんだ」

「それで、この高校の校舎の中に……ですか？」

「校長が恩義を感じて……ていうのはウソだが、おそらく事前に鎌倉から連絡があったんだろう。その目的は校舎の中の調査にあった。あの時の荒魂の動き、教室の窓から見

ても明らかにこちらの方に向かってきた。その前の二件の調査の結果、この校舎に荒魂を引き寄せる何かがあると鎌倉は踏んだんだ。で、予測より早くここに荒魂が出現したので鎌倉側はあせった。止むを得ずこの薫が鎮圧して、事なきをえたが、この様子を全校生徒に観られてしまった……」

「この高校に荒魂を引き寄せる何かがある、ということをごこの生徒さん達に知られたらいけない、ということですね。それで、巡回中の薫さんが偶然ここに居合わせて荒魂を鎮圧した、という事にして、さらにこの高校に転入させることで本来の目的を隠した、というわけですね？ 薫さん？」

「…… ああ、ここでの任務は夜中の校舎の中の調査だけでよかったんだ。だが調査の前に荒魂が現れちゃった……それに、この高校に転入する事だっ得上が決めたことだ。おそらく表向きは福部の旦那の推測通り、刀使の受け入れ態勢の確認とかいってな。さらに、伊原の旦那の推測も含めて、用心棒としてもな…… また現れるかも知れんし……」

「なにもこんなに手の混んだことしなくたって…… 休校にでもすれば簡単に調査出来るじゃない……」

「言つとくがこれは極秘裏に、ということだ。徒らに事を大きくしないためにもな。こ

こ 神山高校は部活動が盛んだし、運動部員なんて日曜にも学校に通ってくる。それに、  
ま だ鎌倉への反発も根強いということもある……」

## 第8話

「……そういうことだ、本来この事はお前達には明かすことのできない任務だった。オレの名前が表に出ないのも諜報活動と隠密行動がオレの主要な任務だからな……だが、つついこのホウタロウの『推理』というものに興味を持ちまっただもんでな！結果としてバレちまったが……でも、夜中に徘徊、てのは……よく解ったな……」

「薫がここに来てしばらくの間は授業中いつも眠そうにしていたからな……夜型の生活習慣かとも思ってたが……」

「いつから気づいた？」

「違和感を覚えたのは薫が俺たちと一緒に初めて部室に行こうとした時だ。場所を教えしていないのに先頭切って歩いていたしな……それに俺たちの教室ではまだ地学関係の授業を受けていない」

「わたし、部室のことを地学準備室、て言いましたっけ??」

「そうかも知れんが……とにかくこの時の薫はすでにこの校舎の教室の場所と名前を総て押さえていた、ひよつとしたらどの部活が使用しているのか、も……」

「まあどちらにせよ油断だったな……まさかこんな事で尻尾を掴まされてしまうとは……」

「そして夜中に……て事だよね……で総ての教室に……て、どうやって……」

「ふくちゃん！ あれでしょ!! マスターキー!!」

「そうだ。職員室からチョット拝借して……スペアキーも作っちゃったがな、へへっ！」

「なにもそこまでしなくたって……当直の先生と一処に……」

「これはおそらく校長、教頭クラスの一部の関係者しか知らされていない隠密行動だったということだろう。その証拠に薫のやつ、エリートのかせして伊原の怪談に怯えていたしな。つまり、夜中の探索中、当直教師に気づかれないためにライトを付けることさへ出来なかつたわけだ。それでさつき当人が言つてたように、ここに来て初めて学校の校舎の暗闇に怯えることを覚えた……と、違うか？」

「……そうだ……これまで多くの荒魂と対峙してきて度胸が着いてきたと思つてたが……ただの暗闇にこんな怯えるなんて……特別遊撃隊員の名が廃る！ てもんだ……」

「でもちよつと待つて！ 折木……ここまでの推理、て……荒魂の位置情報、機関紙の写真、マーちゃんの日頃の言動……これだけで導き出したの!」

「……ん？ そういう事になるのか……そうだったか？ 後はお前たちからの情報かな……」

「益子さん、千反田さん、摩耶花……ホータローてこういうヤツ、てことさ……!」

「そういう事だったんですね……薫さんがこの校舎で寝泊まりしていたのは……でも、もう一つ、解らない事があります！ 荒魂を引き寄せるその原因です！ 折木さんには解っているんですね……!! どうです?! 折木さん!!」

「それは……俺にも解らない。おそらく薫にも……薫に知らされていない事実というのもその原因なのかもしれんな。あるいは鎌倉側も……」

「……ここに来る前に、この高校の出来る前の古地図まで取寄せて祠の跡や鑪場の跡を確認してみたんだが、何一つ見つからなかった……だから鎌倉は俺を派遣した。校舎の中を調査するためにな……こういうことは普通の刀使には出来ないからな」

「手ぐせの悪いところもな……だが、俺にももう一つ解らない事がある……それは、まあいい……俺もつかれた……」

「おお、今日は里志も来てないのか」

「日直お疲れ様です、折木さん。福部さんは今日手芸部だそうです。今から文化祭にかけての新作の仕込みだそうですよ？」

「まだ五月の末だぞ……伊原も……て薫と漫研だったか」

「はい！ 薫さん、なにかスーパーヒーロー？ という分野に詳しいそうで、漫研さんの方からお話を伺いたいとお誘いがあつたそうです！」

「ほう…… 当人もそんなもんだしな…… あそこは特撮ものもいけるのか」

「どうなのでしょう？ でも摩耶花さんが『必殺』シリーズをご存知だったとは以外でした！」

「つってお前…… あれはかなり昔の時代劇シリーズじゃないのか……？」

「はい！ 子供の頃祖父母と一緒にテレビで観たことがあります！ あのお婿さん、格好よかったですね！」

んー……衛星の再放送かな？ 俺もそんなに詳しいわけでは…… 何となく雑学程度に憶えていただけだな…… しかしあのくたびれたおジサマをカツコイイとは…… 千反田の男の趣味というのも…… いや今は問うまい。

「伊原のやつも…… 少女漫画脳とばかり思ってたからあの話の展開は呆気にとられたぞ…… まああいつの漫画の趣味も相当古風だからな」

「漫画の事はわたしにはよくわかりませんが、漫画も時代劇もはや古典と言ってもいい作品はあまたに在ると思います！」

「おお、そうだな……」

まあ、千反田のあの迷推理も…… 古典的ともいうべき展開だったしな……

「というわけで、折木さん、今年の文集はどういうテーマにしましょう！」

なんだ…… 唐突に！ こいつの発想の飛び方も相当…… でも確か去年の文集のネタを捻り出したのも…… まだ一月早いじゃないか！

「なにも今でなくていい。里志と伊原が集まった時にでも……」

「薫さんですよ？」

「おい、それは……」

薫の奴、いつまで居るか知らんが…… 少なくともここでの任務が続く限り俺たちとこの部活で、という事になるが……

「最近薫さんも生活に余裕が出てきたようですから、ただ本を読むだけではなく何か文章でも、と思ったんです」

本は本でも漫画じゃないのか？ 最近は伊原に借りた少女物も読んでるようだが…… 薫に文章なんて書けるのか？

「もう一月は荒魂さんが現れておりませんからね。あ！ もうほかの高校に引っ越しているかもしれません！ もしそうだったら…… 薫さんも安心して部活動に専念できますよ!!」

「そうだったとしても…… その高校に転入しに行くだけだろ……」

「あ！ …… そうですね…… 薫さんのお仕事はそういうお仕事でした……」

またシユンと……薫がここに居着いてからまだ一月しか経ってないのか。あいつ、完全に馴染んでるぞ。一年も一緒にいたみたいだ。ただ、生活に余裕というものは……俺の思い違いでなければ……

「おう里志、お前もか」

「うん。10分は遅れて来るように、て摩耶花からの厳命でね」

……フム、そこで里志も俺の教室に寄ったってわけか。千反田の奴、『とにかく10分！ 10分ですよ!!』それから部室にお越し下さい!!』て念を押して薫と部室に向かったがな……女三人で秘密の女子会……女子会なのか!?! なにやら良からぬ企みでも……てあいつらそんなに陰湿でも無かったしな。

「ところで古典部の出し物は決まったのかい? ホータローは」

「千反田はテーマを決めたいと言っていたが、みんな個別のを持ち寄ってじゃ駄目なの

か？」

「おそらく書き割りの問題じゃないかな。テーマが一貫していると編集がし易くなるのか」

「去年は伊原が中心になって割り振りを決めていたしな。お陰で俺の担当が割増になったが」

「今年は益子さんもいるからね。五人だとまた勝手が違うのかも知れないよ」

「薫か……この騒動が収まるまでの間だな……」

「益子さんも鎌倉では始末書に追われて……なんて言ってたから文章を書くことには負担は無いかも知れないしね」

「あれは嫌々書かされるもんだろ……あいつの専門は何だ？ 特撮物か？」

「それだと漫研向けだね。ここ古典部では一応活字中心のメディアじゃないと。それに、なるべく早く決めてくれると助かるな。僕と摩耶花はそれぞれ掛け持ちだからさ」  
「おう…… そうだったな……」

薫も漫研と掛け持ちに…… なってる暇なんて本当は無いはずだけどな…… いや俺の勤が正しかったら…… むしろほっといた方が良いのかも知らんし。

「そろそろかな。じゃあ行きますとしますかホータローの旦那！」

「おう」

「……ん？ 待ってホータロー…… くん?? …… もう少し待ってろってさ！ 摩

耶花が！」

「おう…… なんならもう俺先に帰って……」

「じゃあそのようにメールで返しとくよ…… んー、ヨシと！ ん？ もう返事が…… 直ぐ来るように、てさ！ ホータロー！」

何なんだ…… 俺たちに気を持たせようとしているのか…… デレか！ デレ期なのか!? …… なんて事あの連中には…… やれやれ。

## 第9話

「おう、待たせたじゃ……」

『……まっ！ まてっ！！ 入るな！！ おい……！』

「ん!? 何だ!？」

「どうしたんだい?」

「扉が…… 向こうから押さえているみたいだ。おい……」

「なんなんだ?」

『薫さん!』

『マーちゃん…… もう観念したら?』

『でもよお…… オレ…… はずかしーっ!!』 『ねねー??』

なんだ？ ハンガーストライキか？ 無期限部活動停止、て事か？ それなら……

「おう、何か知らんが開けないってなら今日はこれで部活は終了だ。じゃあな」  
『……ままたて！ ホウタロウ!! そこまで！ ていうなら仕方がない……』

誰も頼んでいないのだが……勝手に扉が開いて、そこには……

「おお……」

「益子さん……やるじゃない……！」

「どうですどうです!!」

「まあ私の一年の時の時のお古なんだけどね……似合うでしょ!!」  
「摩耶花！ GJ！」

「……あんまりジロジロ観るな……!!」「ねね……」

……(こ)神山高校の女子指定の制服、つまりはセーラー服に……髪も少しばかり膨らみ

具合はあるがストレート、で……頭部には左右にはなたお馴染みの癖毛も……千反田の艶のある真つ黒な髪とは趣きが違うがこれはこれで……

「いいじゃない！ でもどういいう嗜好の変化なのかな？ 益子さん！」

「おう……いまさつきこの部室に着いた途端こんなハメに……いや、オレは悪くない！ この旦那衆が悪い!!」

「ええ!? とてもお似合いですよ？ 薫さん！ せつかく摩耶花さんが譲つて下さるといふのですから明日の朝にでもこの格好で……」

「いややややそれは!! オレにはこんな！ カワイイものは……」

「ねね??」

「そんな！ とても似合うよ益子さん！ ホータローも、だろ？」

「ん……ああ、まあこの学校ではそれが当たり前だしな……いいんじゃないか……？ それに……初めて登校する中学の新生生みたいだし……」

「!……オレキッつ!!」

「折木さんっ!!」

「……ホータロー……いくら照れ隠しでも……それはOUTだよ……」

「……ふハハハハハハッ!! 流石ホウタロウの旦那!! 言う事が違うぜ!!

フフ……」

「ねねっ?」

「いや、その……悪かつ……」

「決めたぜ! オレ明日からコレ着て授業に出る! いいよな? 伊原の旦那!」

「……もちろん! ぜったいこれ着てクラスに来て頂戴!! ウレシ〜っ!!」

「そうです! ぜひぜひ!!」

「雨降つて地……じゃなくて笑う門には……かな?」

「おお、そうか……! じゃこれにて一件……」

「……折木、でもさっきのはやっぱりナシだからね」

「おう……そうだな」

照れ隠しの度が過ぎたか……で、おつ、俺はそこまで……フウ……

「んでねー!」「おおマジか!!」「キヤーっ!」「ほんと〜?!」  
「ねねー!」

「……すつかり馴染んだな」

「です! やはり制服のお陰でしょうか?」

「……この制服を着て授業をするようになってわずか二日……教室の女子との距離が一機に短くなった。もともと姉御肌なところもある薫のことだ、今までもいろいろと個々に相談事を持ちかけられることもあったらしいのだが……ここに来て普通の高校女子という雰囲気になってきた。もつとも腰には例の装備を装着してのことだが……」

「じゃ! 薫ちゃん!」「私も! 部活!」「おう! またな! じゃ、旦那方! 部室へ

GO! だ!」「ねー!!」

「おう……」

「ハイ! まいりましょう!!」

二人揃ってルンロン！ と…… 馴染んでいる、というのはこの学校だけでなく普通の高校生として、だな……

「確かに……俺んこの仲間つてのは……剣術しかアタマにない奴とか直ぐアタマに血が昇つて喧嘩腰になる奴とかボソボソつと言いなながら痛いところ突く奴とか矢鱈滅多ら抱きつきたがるキンパツとかいつもニコニコしながらも無自覚に腹黒いお嬢とか……ホウタロウ、お前はホントにマトモに生まれついてよかつたな……」

「……へえー！ 折木がマトモねえ……」

「なにをいう伊原……さすが……！ 薫サマはよく観てらつしやる」

「まあ平均値として一般的な無気力男子高校生だよねホータローは」

「薫さんも！ とても普通で一般的で素敵な高校生ですよ!! どこに出しても誇れるぐらいにです!!」

「おう……ありがとよ……！ 普通つてことがこんなに重宝なモンだつてことが知れただけでここに来た甲斐があつたつてもんだ」

「ここでも読書だけではなく取り留めのないお喋りも。ここでの会話が去年の文集のテーマの切っ掛けになったり様々な事件？ の解決の糸口になったり……けっこう創造的な無駄話が繰り広げられていたんだな……」

「オレも、なのか？ いいのか？」

「はい！ 数枚でも構いません！ 何か今年の文集に載せるものをお願いします！」

「いいのか……？ オレ、そんなに本を読んでる方じゃないぞ？」

「マーちゃんの好きなテーマでいいのよ！」

「じゃあ僕も自分の趣味を大いに發揮してみんなかな。ホータローは？」

「俺は…… まだいいだろう…… 決めていない……」

「折木…… 早くしないとそれだけ割り振りを多く受け持つ事になるかもしれないわよ…… フフ！」

脅しか？ 伊原め…… 去年の恨み！ どう晴らしてくれよう……

「みんな御免！ こんなに遅くまで……！」

「まあいいってことよ！」

「そうだよ、お泊り会みたいでいいじゃないか」

「…… ほんとに泊まるってんなら七時に帰るぞ……」

「ええ？ ここでのお泊り、楽しいじゃないですか！ ふふ！」

ここ地学準備室、俺たち古典部の面々はこういう訳か消しゴムを握りしめたり墨を塗ったり半透明？ のビニールシートをカッターで慎重に切り分けたりはたまた活字の印刷された紙を切り貼りしたり…。 おおよそ文学とは無縁…。 ほどでは無いが地道な軽作業に勤しんでいる。

「どうじん？ てこういう風に作られるんですね！ 摩耶花さんは毎日これを？ 凄いですねー！」

「おお、オレもまさか漫画を手伝うことになるとは…。！」

「冗談じゃない…。 なぜ俺まで巻き込まれなければならぬのだ…。！」

「まあ、僕は使われ馴れてるからね。 ひどい時は二晩摩耶花の部屋で缶詰さ」

「ふくちゃん…。 それ誤解を招きそうだから…。！」

伊原の部活である漫画研究会の有志数人が今度のコミケ？ というイベントで同人誌を出品するらしい。 より正確には参加できた知合いのグループの好意で置かせて貰えることになったのだが。 その仕上げの追い込みに俺たち古典部まで駆り出された…。 まだ一月はあるらしいが。 それにしても…。

「…… 漫研はここより大所帯だろう。どうして俺たちまでこうなる……」

「漫研も人それぞれだからね。いわゆるガチ派とエンジョイ派の確執つてとこかな」

「そうよ…… 去年の文化祭だつて…… 悪かったわね!!」

「まあまあ! こういう事は、滅多にありませんよ?」

「ああ、オレにとつては最初で最後だな」

薫のお陰(せい?)でこの地学準備室も八時頃まで使用する事ができるようになった。こんなこと文化祭の前の準備期間ぐらいしか認められてないのに。薫の顔の力がここまで及ぶとは……

「わたしの家でも良かったのですが、薫さんに外出許可が出なかつたですからね」

「チタンダの旦那の家つてデカいと聞いたが一度目にしたいもんだ」

「そんな! 普通ですよ? ね! 皆さん!」

「…… うーん、チーちゃんの地元ならね……」

「この辺に永く根を下ろしている家ならね。例えば……」

「桁あがりの四名家か?」

「うん！ どうだいホータロー！ その言い回し、もう流通しているんじゃないかい？」  
「俺が憶えてただけだ……でも薫、外出許可が下りないって、ずっと校舎に居るのか？」

「日曜も」

「そうだな…… オレがここに詰めているのは…… 荒魂発生の抑止になると上でも判断しているからだろ」

里志から聞いた話だが、刀使の中にはただそこにいるだけで荒魂が寄り付かなくなる達人的な？ ベテランもいるらしい（十代の女子だが……）。中島敦の小説に出てくる弓の名人みたいな人物は現実に実在する、ということか？

「確かに刀剣類管理局のある鎌倉では荒魂の発生は滅多に無かったな。その代わり周辺で荒魂が発生してた。そこから鎌倉に向けて、ということだな」

「それも一年前までの話だよ。今じゃ…… という事だけだ」

「ふくちゃん、それは……」

「まあいいつてことよ！ オレ達の任務はそれも折り込み済みだからな」

元ネタ

桁上がりの四名家

第1話

去年の文化祭

第12～17話

## 第10話

「ありがと〜!! みんなおつかれ〜!!」

「おう……」

「おわった、のか……?」

「出来たのですね!? よかったです!!」

「もう少しで9時……結局二晩かかったわけだね……」

二日目の残業……部活時間の延長でようやく伊原達の原稿が収まった。基本何の報酬もないこの作業にこんな労力を費やすなんて……プロの日常はこれが延々と続くのか……それに姉貴め……! この部活はただ籍を置いて本を読むだけでよかつたんじゃないかつたのか!?

「ごめんねみんな! こんど何かご馳走するから!」

「ご馳走ですか? あ! どうでしょう摩耶花さん! 今度わたしとながご馳走を拵

えるのは!!」

「本当かい千反田さん! 摩耶花も!」

「おい…… お前もこき遣われた方だぞ…… なんなら俺ラーメンな」

「ふーん相変わらず味気ないヤツねあんたつて……ラーメンでいいならアンタだけそうしてやるけど……?」

「オレも……ラーメン喰いてえわ……」

さすが薫嬢はわかかってらっしやる。こういうチマチマした労働の後には思いつ切り麵類をズズ〜っ!! と胃に掻き込むつてのが定番だつてのに。て……俺そこまで労働に勤むことつてなかつたな……

「ではこれで今日はお開きです! 皆さんお疲れ様でした!」

「おう……」 「……ねねっ!」

「ん? どうしたのねねちゃん?」

それまで伊原の懐で丸くなつていたあの生き物が急に起き上がった。ここんどこ毎日こいつはずつと寝通し気味だったが。

「クンクン、ねねね!!!」

「……ん!? おい……! まずいつ!! お前ら早くこの校舎からは離れる!!」 「ねねー

!!」

薫が例の端末を取り出した…… バイブだったのか音はしないが……

「何があつたんです?!」

「マーちゃん!」

「いいから早く! て…… まずい…… 御刀が……」

「そーいや薫、装備は?」

「寢床だ…… 油断した! 兎に角お前等はっ!!」

そーうだ、このところ薫は装備を外して仕事を手伝つてた……

「わかつた…… いくぞみん……」

「待つて折木! あれつて……」

「グラントに…… あれは……!」

「荒魂さん、でしようか……」

特別棟四階の窓から観える…… 赤い煙のようなものを纏つて…… 地鳴りも…… この前と同じぐらい……

間違いない…… でも何でまた!

「正面玄関からじゃダメだ! 裏の方から出られないか!」

「一階の渡り廊下からなら! じゃチーちゃん! はやく!!」

「どうした千反田!!」

「……千反田のやつ窓から離れない…… 食い入ってるのか? あの時とは訳が違  
う……!」

「おい…… お前の目…… 好奇心に駆られてる場合か!」

「おいつ! はやく! …… しょうがない!!」

「……千反田の腕を掴んで廊下に……」

「ちよつ!! ふくちゃん……」

「おいホータロー…… こつちも……」

廊下側の窓からも赤黒い煙が…… まだ裏の校舎の丘の向う側ぐらいか?

「クツ! 裏からもか…… 一度に二つか? こんなことって…… とにかくお前等はオ

レと一階へ!

オレの部屋に來い!!」

「行くよ! 摩耶花! ホータロー! 千反田さん! …… 千反田さん……?!」

「おい……!」

「……千反田…… 廊下の窓にまで…… おい!! 仕方がないまた腕を!

「どうしたつ! はやく一階へ!!」

「……………」

……おい！ …… 目の輝きがまたさつきとは……なんだ！ 何故窓を開ける!?

ちよっ……！

身を乗り出して…… ここは四階だ！ おいつ!?!

「……………わたし……………いかなければなりません……………」

「はっ!? 何いつてんだ早く窓から離れろ千反田!!」

「千反田さん!?!」

「ちよっ！ チーちゃんっ!? オレキっ!! チーちゃんを!!」

「おいつ!! 千反田!!」

止む得ん！ こいつの腰を！ おい!! 何のつもりだ千反田!! …… はっ!?

「……きえた……」

腰に触れた瞬間スツ……と……

「……イヤーツ!! チーちゃんつ!! オレキなにバカなこといつてんのよつ!!

下よ下つ!! 中庭にチーちゃんがつ!! マーちゃんは!？」

「先に部屋に……!! とにかく中庭だホータロー!!」

「ん!? お、おう!!」

「チーちゃんつ! チーちゃんつ!?!」

「……落ちたとしたら……この辺だよね……」

「ああ……でもあれは落ちたというより……」

「オレキつ!! まだそんなこと言ってるのつ!! チーちゃんが!!」

俺だっておかしいと思ってる……だが……

『キエeeeeeeeeエっ!!』

「……なに……!? いまの!?!」

「益子さんじゃ…… 気合かな……」

「あの方向だとグラウンドだな……」

「でもほら…… 丘の方が……」

裏の校舎の上空がますます赤黒くなっている…… 地鳴り…… ? 木の倒される音か…… ?

「おいつ!! まだこんなところに!! 何してる!!」

「マーちゃんっ!! チーちゃんが!!」

「千反田さんが四階から落ちて…… 見つからないんだ!!」

「おい! ホウタロウ! どうしたっ!!」

「あれ……」

丘の上からだな……赤黒いのが……下りて来ているのか……

「ここは中庭だな……裏の校舎が盾になってくれるか……よしもう一度……」

「……どうしたのマーちゃん？」

「『写シ』が貼れねえ……さつきは……ダラけ過ぎたのか……クツ!!」

「ねね……」

薫まで……いきなり過ぎてまだ状況が……とにかく千反田を探し出して病院に!!ん!?

「へりだな……連絡が云ったからお前達だけでも!」

「でもチーちゃんがっ!!」

「! おいつ?!」

なんだ……おい?! 赤黒いのが裏の校舎の上から覗き込んで……こんなに速く……

跳べるヤツなのか!?

「いや……ヤダ……あれが……」

「クソツ!! お前等はこっちの校舎の中に!! オレの部屋にいけ!!」  
「でもお前……!」

「いいからっ!!!」

「……チーちゃんっ?!」

「なに!? 摩耶花!!」

「あ……校舎の……屋上……チーちゃんっ!!」

「千反田が!」

千反田が……俺達のいた特別棟の屋上の手摺を越えて……門際に……手には……

「チーちゃん危ないっ!! 早く中につ!!」

「千反田さん!!」

「何で……また……」

「まさか……あの旦那……」

おい!? 何を言い掛けたのか質そうとした瞬間……

『  
．．．．．荒魂様!!!  
．．．．．どうか御鎮まり下さいっ  
．．．  
!!!!  
』

「  
．．．．．キャーーーーーッ  
!!!!  
」  
「摩耶花!!?  
．．．．．千反田さん!!  
」

飛び降りた!? いや跳んだのかっ?!

「……………! いけねえっ!!」

薫も跳んで…………… 迅移か!? 空中で千反田を……………

「……………ふう……………旦那……………気を失ってる……………」

抱きかかえてから舞い戻って…………… おい千反田!!

「……………チーちゃん無事なの……………?」

「……………よかった……………」

「ああ……………」

俺まで腰が…………… 一体何が起きたんだ……………!?

「……………ふくちゃん、あれ……………」

……………! 裏の校舎の荒魂は!?

「……………うそ……………」

「．．．．首が．．．．落ちたのか．．．？」

「これ．．．．チーちゃんが．．．．？」

「．．．．としか．．．．あつと言う間だったしね．．．．」

「おう．．．．オレにも．．．．でもこれで納まったようだ．．．．」

「ねね．．．．」

荒魂の首と思しき赤黒い何かが直ぐ近くの中庭に．．．．もう原形は留めてないようだな．．．．

裏の校舎の上のも．．．．そして千反田の右手には．．．．

## 第11話

「…… どうだ？ 千反田の様子は……」

「…… 寝息をたててる…… よかったチーちゃん……」

「…… とにかく、これでしばらくは落ち着くね…… でも荒魂が現れてからまだ一時間も経ってないんだよ……」

「そうだな…… ここに来たのはまだ九時半前だったし……」

「まだ…… 出られないのかしら……」

「まあね、益子さんがここに戻るまでの間じゃないかな」

荒魂の一件を終わらせたあと、薫の言付けで薫の宿泊所に缶詰めにされている。灯りもつけるな！ との事でこの物置場は真っ暗闇だ…… 千反田は薫のベッドの上で安眠中…… 人の気も知らんで…… !

『二つともオレが片付けた事にする。本当の事を言ったら面倒だ……』

という事で今学校の敷地内では警察、刀剣類管理局の担当者、ノロ回収班など……とにかくほとぼりが冷めるまでここを動くな！ とのこと。

「チーちゃんの家には私のウチでお泊り、て事にしたけど…… 九時に仕事疲れで熟睡…… てうまく誤魔化せてるのかしら……」

「まあ仕方がないね…… 僕もホータローの家で、て事にしてるけどさ。一度も行ったことないけど」

「俺はどうする!? て…… 別に普段からそんなに心配されてないからな」

「家でも影が薄いのね…… さすが折木……」

「ほつとけ。お前は里志の部屋でお泊りにしとけ。満腹満腹……!」

「ちよつ……! もう…… ふくちゃんもそれでいい……?」

「なんでそうなるかな……」

少しは気分が余裕が出てきたか…… 軽口も出始めてきた。そうなると必然的に……

「あの時のチーちゃん、て……」

「驚いたよね…… あんな事になるなんて」

「この刀も…… いったいどこから取り出したのか……」

俺たちの側には刀が一振…… 鞘、柄ともに白木造り。何の装飾も無い……

「世界を股に掛ける大泥棒の相棒が使つてそうだね。流石に手に取つて鞘から抜きたい…… とは思えないけど」

「やめてよ…… こんな暗闇で…… 抜くなら折木に向かつて抜きなさいよね……」

「俺が真つ二つになつてもいいと言うのか……？」

軽口も悪口になりかけた頃に……

「……おう、バレてはねーようだな」「ねね……」

「……マーちゃん……！ やつと灯りが点けれる……」

「なんだ、怯えてたのか。まああの幽霊騒ぎで布団に包まってただけはある」

「なによっ！」

「旦那方……！ シー……！！ チタンダの旦那は……」

「……ああ…… まだ寝ている…… もう現場検証とか終わったのか？」

「ただだが…… まあ後はノ口の回収かな。二体もあるから一晩掛るかもしれん」

「結局今日帰れないのね……こんな形でお泊り会だなんて……」

「……すまねえ！ オレのヘマだ……！ オレが気を抜いてさえいなければ……！」

「そんな！ 私が無理をいって助っ人を頼んだから……」

「……摩耶花のせいじゃないさ。こればかりは誰のせいでも無いんじゃないかな？」

「里志…… お前顔マツ青だぞ……」

「……そうかい……？ だとしたら僕もこの校内の暗闇の怖ろしさに目覚めた……」

「ということだよホータロー……」

「もうおいそれと怪談話も出来ないってわけか。いい薬になったな里志」

「はは…… ところで益子さん、この刀のことなんだけど……」

「ああ、これか……」

例の刀を薫に渡す。ん…… 抜き始めたか…… 刀身を人に向けなくて構えたな……

「……これはオレとは合わないな…… チタンダの旦那ならあるいは……」

てこれで旦那はあの荒魂を鎮めたんだよな……」

「合わない、て？ マーちゃん？」

「オレ達刀使というのは自分で御刀を選ぶんじゃ無い……御刀に……オレはコレだ……に選ばれて能力を発揮出来るようになるんだ。チタンダの旦那の場合はこの御刀ということになるが……これは……」

「何があるのかい？ 益子さん？」

「これは……御刀、というほどの名刀でもない……どちらかと言うと……軍刀だな……」

「しかも昭和初期の……」

「いわゆる昭和新刀、てやつだね、益子さん」

「里志……お前はホントどうでもいい知識も仕入れてるんだな……で、その昭和の刀というの……」

「ちやつかり尋ねてるじゃない……でもその刀では、て事なの？ マーちゃん？」

「オレも詳しいことは……でも刀に関して少しばかり目が利く。しかもコイツは玉

鋼から打ち出されたものでも無い…… 一体何であの荒魂を……」

「益子さんは前にも言つてたけど、玉鋼から造られた御刀で無いと荒魂を鎮めることは出来無いんだよね。それはつまり……」

「ああ、みんなも知つての通り、ノロはこの国の砂鉄から玉鋼を取り出す時に不純物として廃棄…… 古代にはな…… ある時から祀られるようになった…… 今なら御神体だな…… だが祀られずに放置されたままのノロが荒魂と化して俺達人間を襲うようになった。それを祓えるのが…… という事だ……」

「今ネットで調べてみたんだけど、明治以降の刀というのも一言で言い表せないぐらい入り組んだ歴史があるみたいだね」

「ああ、製法も材料もマチマチだ…… 外国産の鋼鉄を使った物もある。さらに研究も進んで古来の製法よりも更に丈夫に出来ているものもある。実際に戦場で使用する為にな。だが、荒魂を鎮める為にはやはり古来の製法で……」

「だから刀使達は名の在る銘刀を現場で振るっているんだ。選ばれた、ということもあるがな……」

「そうか…… 刀にもいろんな歴史があるんだな。」

「……なあ薫、あえて答え難い質問をする。こんな事になったんだ。質問にはちゃんと答えてくれ……」

「なによ折木…… こんな時に！ それにこのことはもういいって……」

「…… いや、ホウタロウ、どうやらオレはお前の質問に真摯に答えなければならないよ  
うだな…… いいだろう」

薫の奴も覚悟を決めたか…… では俺もだ…… !

「じゃあ、薫…… お前はここに来てから初めの一週間ぐらいは真面目に夜中の探索を行ってきたな…… だがそれからお前は探索をしていない。どういうことだ？」

「…… ホータロー、なにを…… 益子さんは前に夜中に校舎を調査するためにこの高校に来たって…… ホータローもそう推理しただろう…… !」

「そうよね…… マーちゃんはたしかに……」

ん…… 伊原の反応が…… 俺に食って掛ると思ったが…… そうか……

「……やはり気づいていたか…… ホウタロウ、お前は流石だ……」

「どういうことだい？ 益子さん、ホータロー……」

「……マーちゃんはここでの生活が楽しかったのよね…… だからでしょ……？」

「摩耶花まで…… 説明してくれないか？ 摩耶花！ ホータロー！」

「簡単だ。薫はある時から昼間眠そうにしていなかったからな」

「そう…… でも部活の終わり頃にはいつもあくびをしていたし…… しばらく仮眠を取ってから深夜に、と思ったんだけど…… チーちゃんから聞く話では毎朝元気が良くてお昼もちゃんと食べるようになったって喜んでいたし…… あの話を聞いてからもしや！ て思ったの……」

「薫が俺たちに正体を明したのはそれからまた二週間ぐらい後だけだな…… 俺と千反田は同じ教室だから何となく薫の日常の変化を感じていた、そういうことだ」

「じゃあ僕だけその事に気づいて無かってわけだね…… してやられたよ…… でもそうなら何で探索を打ち切ったんだい？ 益子さん」

「おう……それは……」

「……一つには、捜査に詰まってしまった事、一つには探索をねね？ に任せてたという事もある、そうだな？」

「ねねちゃんを？ どうやって？」

「おそらく人の通れない所、排水管や通気口、外壁もあるな。とにかく校内でも探索が難しい所をだ」

「そういえば……このねね……いる時といない時が……だったね」

「ああ、こいつも生き物だ。ちゃんと休ませてやらないとな」

「ねね……」

「で、もう一つ…… 答えは伊原が言ってしまったようなものだがな……」

元ネタ

幽霊騒ぎ 第7話

軍刀の情報はネット、特に

W i k i

からの記述を要約したものです。

## 第12話

「……じゃあ、言い方は悪いけど……サボってたって事かい？ 益子さん……」

ズバリ直球だが……他に言い様も無いだろう。

「ああ……そうだ……オレはサボっていた。何か馬鹿馬鹿しくなったんだ……今までオレのやっている事、生活、任務も……ここに来てこの普通の高校で過すことに馴れてきたからな……」

「でも……ここに居るだけでも違うってマーちゃんもふくちゃんも言ってたじゃない……」

「そうだな……オレは慢心してたかもな。だからあんなヘマをした……」  
「装備を外して校内にいた、という事がか？」

「ホウタロウ…… お前つてヤツは…… そうだ。刀使はいつでも御刀を身から離さないでいるのが本分だ。御刀が無ければオレ達の能力はほぼ個人差で決められてしまう。オレ自身の力はまだまだだつてことだな」

「御刀を身に付けてないと実力が発揮出来ない、という事だね。じゃあ今夜荒魂がここに現れたというのは……」

「…… 御刀とオレが離れていたからだ。だから皆を危険に曝した。特に千反田…… さんを…… オレは……！」

「…… はい？ 皆さん……？ ここは？ わたし、どうして……??」

ん！ 千反田!! 目を覚ましたか!? 口調を観るに、ダメージは無いようだが……

「…… チーちゃん? …… チーちゃんつ!! 大丈夫!?! どこも痛くない!?!」

「千反田さんつ!?!」

「……ふう…… お前…… 憶えてないのか……？」

「えーと…… 摩耶花さん…… ?? どうして…… あっ!! 原稿! 原稿は無事ですか!?! あれからわたしは……」

「バカっ!! バカバカバカっ!!! 原稿なんていいのっ!! チーちゃんが無事なら……」

「ウワーーーーッ!!!」

「え、えっ? えーと…… 泣かないで下さい? 摩耶花さん! わたしは無事ですよー?」

「フフっ!」

「ハア……どこまでもコイツは……でもこういう処がこの時点では救いだ……」

「千反田さん!! すまない!! オレのせいで千反田さんを危険な目に……!」

「あの…… 薫さん? わたしはこの通りですから、そんな…… お顔を上げて下さい? どうしたんです?!!」

「千反田、お前…… 本当に憶えていないのか……? あの時の事を……」

「そうだ! 千反田さん! これ! 見覚えあるかい!」

里志：… なにもこんな時に… いや、もうそんな事言つてられないぐらい時間は切迫しているのか…

「これ… ですか？ … はい!? どうしてここにあるんです?」

「やっぱり千反田さんの… だね!」

「わたしの家に伝えられているお刀ですね? わたしの父が時々蔵から出して手入れをしている処を見た事があります。持ち手の… ここにです!」

柄の小口に焼印が… ○に千の印し… 家紋か?

「間違いない、これは千反田さんの御刀だ… 悪い、千反田さん、説明は後だ。これを握つて構えてくれないか?」

「わたしがですか? いいですけど、どうして?」

「… チーちゃん立てる?」

「薫、お前…」

「おう、もうサボりの時間は終わりだ。今夜中にケリをつける……そしてホウタロウ……！ お前に仕事の依頼がある……」

「なんだい……それって、推理のことかい？」

「……そうだな……この時点でその依頼というのは……荒魂を引き寄せる『原因』のことだな……」

「流石飲み込みが早い……どうかオレと一緒にその『原因』を見つけてくれないか？  
ホウタロウ……」

「でもマーちゃん……その原因を覗いたら……」  
「……ここを去ってしまうのですか？」

千反田も察したか……でもこうなった以上早く解決しなければ……

「ああ…… オレはみんなの好意に甘えて二ヶ月の間任務を放棄した生活を送ってきたんだ…… 結果がこの有様だ。特別遊撃隊No.3の誇りに傷をつけてしまったんだ…… だから今夜中に……」

「いやですっ!! 薫さんがいなくなるなんていやですっ!! …… もし今夜の事が薫さんの責任だというなら…… わたしにも責任があります!!」

「チーちゃん!? …… そうね…… チーちゃんがそう言うなら私にも責任があるわね……」

「摩耶花…… 千反田さん…… 責任、て……」

「それを言うなら俺も…… だな」

「……! そう言う事か…… なら僕にも一枚噛ませてくれよ。僕だけ仲間外れというものね」

「お前ら……！ 皆んな…… ありがとう…… じゃ、ホウタロウ…… オレの依頼を……」

「…… わかった。出来るだけのことはする」

「折木さんっ!!」

「チーちゃん…… 仕方がない事なの……」

「そんな……」

「千反田さん…… オレへの好意には感謝する…… だがここは堪えてオレの指示に従ってくれるか……？」

「……はい」

「……これを構えてくれ」

薫が千反田に刀を持たせ、鞘を抜かせて構えさせた……

「……何か感じないか？」

「……いえ、その……なんと言いますか……」

「……部屋の照明を切ってくれ……」

「ええ……切るのかい？」

「覚悟しろ里志……いくぞ」

「……チーちゃん……??」

「これは……どういう事だい？ 益子さん……」

「おい……千反田……」

暗闇の中に……千反田の姿が……  
朧げに光を放っている……

「薫さん……これはどういう事です……？」

「『写シ』だ……御刀と千反田さんとの身体が共鳴しているんだ。つまり……貴女はこの御刀に選ばれたんだ。いや、選ばれていた……」

「じゃあ益子さん、この御刀が千反田さんの家に在ったというのは……」

「いや、おそらく千反田……エルさん……ではなく、女系を遡つての誰かが、という可能性だな。あるいは隔世的な……」

「わたしの家は代々男系ですよ？ 母も祖母も曾祖母も外からお嫁さんとして嫁いで来たのです。それ以前のことは両親に尋ねなければ……ですが……」

「では、その外から嫁いできた誰かが刀使としての家系を引いていた、ということもあり得るかもな……」

「刀使って血縁で決まるものなの？ マーちゃん……」

「まだよく分かってないところがある。一般家庭の子供が御刀に選ばれている事が多いからな……ただその血筋を一人一人辿るとすると……だな」

「マーちゃんはどうなの？」

「オレの家は代々刀使の家系だ……家の女が外から婿を貰って家を継いできたんだ。つまりオレのパ……親父も真正正銘の『ムコ殿』というわけさ！」

「そうなんですか……この御刀の由来は父に尋ねてみないと分からないのですが……」  
「その御刀は益子さんの見立では昭和の初期ということだよ」

「昭和の初期……では！あの頃の……わたしの祖母の話では……先の大戦の戦中末期、戦後にかけて家の書類を少なからず処分した、とこのことを聞き及んだ事があります。もしかしたらその時にこの御刀の資料も……」

「燃やした、という事だね。あの当時はよくあった事らしいけど……千反田さんの様な地方の農家にまで……いろいろあったんだね」

「で、現実には……千反田とこの御刀には共鳴関係……つまり千反田には刀使としての能力が備わっていた……そうだな薫」

「ああ……ただ、この御刀を『特別』刀剣類管理局にもちこんでも、『御刀』とは認知さ

れないだろうな……」

「玉鋼では無いからだね、益子さん」

「じゃあどうしてチーちゃんはこの御刀が……」

「……クンクン……ねね……！」

「……どうした？　ねね？　……この御刀か？　エルさん、コイツに剣先を触れさせ

てくれないか？」

「……　ねねっ!!」

「ん!?　そうか……　そういうことか……」

「どうしました？　薫さん、ねねさん？」

## 第13話

「薄暗いから解り難いかもしれんが…… この御刀から少し青白い微光が観えるだろ  
う……」

「うん、チーちゃんからの光とはまた違う光だけど……」

「おそらく、普通の製鉄法で造られた鋼と…… この国の砂鉄が…… 折り込まれて造ら  
れた御刀じゃないか…… だからこんな光に……」

「玉鋼の御刀では違うのかい？」

「んじゃ、オレの…… 全部は抜けないな…… 途中までなら……」

薫が座構えて御刀の五分の一ぐらいを抜いた…… しかしバカデカイ刀だな…… 改  
めて見ると……

「あ……」

「薫さんと御刀の光が……」

「同じだね、よく観るところも違うのか……」

「これが玉鋼の…… そうか……」

「つまり…… どういう事でしょうか……」

「この御刀にも微量だが砂鉄を含んでいる鋼を使つて造られていた、だから千反田の身体と共鳴してあの荒魂を鎮めることが出来たと、そうだな、薫」

「……え？ あの荒魂さん…… を鎮めたのは…… この御刀を持った薫さん…… なのですか??」

「…… どうする？ 千反田に言った方がいいのか？」

「…… 私は…… ! 分からないわよ……」

「僕にも…… 益子さん……」

「…… 本当の事を言う。エルさん、どうか気を確かに持つてくれ」

「?? はい……」

「…… エルさんには記憶が無いようだが…… あの時荒魂は二つ発生した。そのうちの一つはグラウンドでオレが鎮めたが、裏の…… 校舎に乗りかかっていたもう一つの荒魂は…… エルさんが……」

「…… はい？ わたしがですか?? でもどうやって…… わたし…… 全然憶えてません…… すいません……」

「いや！ それならそれでいい！ …… ただ、御刀の力が強すぎると…… だな」

「あとひとつ、この御刀なんだけど、千反田さんは蔵の中に、て言ってたよね。でもここから千反田さんの家は…… 結構あるよね……」

「それも…… エルさんの能力だろう…… 『迅移』を使ったんだ」

「『迅移』って！…… そうだね…… 今の千反田さんなら有り得る事だよね」

「じんいってなんですか?? それがわたしと??」

「…… 千反田…… お前のアタマはつくづく幸せにできてるんだな……」

「ちよっ！ オレキ！」

「わあ！ そうですね！ とても嬉しいです！ ありがとうございます折木さん!!」

「……なんかオレの周りのダレかに似ているが……今は思い出したくない……」

「……なあ薫、俺の勘だが……この一件……荒魂の発生、校舎の中の原因、この御刀、そして千反田……これらは全て繋がっているんじゃないのか……？」

「どういう……ああ……そうか……そうかもな……これで全てのコマが揃ったのかも知れん……」

「そうなのかいホータロー……じゃ、いよいよ……」

「原因の在りかがわかった、てこと……？」

「では……もう……」

「今はまだだが…… そうだな、…… 問題の原因は……」

「どこなんだい？ ホータロー！」

「…… 校舎の中だ……」

「オレキ…… あんたバカにしてんの!？」

「…… その御刀と千反田を以てすれば……」

「わたしが、ですか？」

「おう…… そうだな。エルさんがこれを構えて校内を歩いていれば、あるいは、だな……」

「…… どうしてそんな事で原因が…… 益子さん、ホータロー……！」

「俺にもわからん。ただこれらの条件が揃ったのは何らかの運だな……」

「……そしてオレたちの勤もだ……エルさん、悪いがこの御刀を構えながらこの校舎を歩いてくれないか……？」

「はい??」

「……いや、校内全部を捜す必要は無いかも知れない。俺はもう当たりをつけている」

「マジか……ホウタロウ……！」

「そうなんですか……！折木さん！どこなんです!?!」

「なんでもっと早く言わなかったのよ……！」

「言つとくがこれは勘だ。何の根拠も無い……」

「で……どこなんだい？ホータロー……」

「……説明は後だ……いくぞ」

「ええ．．．もしかして灯りも点けずにかい．．．僕は遠慮しとこうかな．．．」  
「私は行く。これでマーちゃんとも、なら．．．」

ここ薫の寢床、特別棟一階階段下物置から四階東側教室手前．．．二時間ぶりの部屋  
の前．．．

「ホータロー……ここって……」

「ああ、俺達古典部の部室だ……」

「おいホータロウ……」

「……オレキ……！　いいかげんおちよくるのも……」

「里志、この部屋のプレートには何て書いてある？」

「何てって……あつ!!　そんな……そうなのかい？」

「いったいどういうことなんです?？」

「まずは入るぞ」

「一応荷物はそのままだね……」

「ねねもいるか？」

「ねねっ？」

「ねね、お前もスタンバっとけ…… エルさんの助手としてな」

「ねね！」

「エルさん…… 御刀を抜いてくれ……」

「はい……」

千反田が刀を抜いた…… おい光が……

「まずい……！ カーテンを！ エルさんも御刀を鞘に……！」

「マーちゃん…… もう外に人がいないみたいだけど……？」

「念のためだ…… ゆっくりと閉めろ……」

「わたし、どうしたら……」

「わかった…… 三分の一ぐらいだ……」

部屋のカーテンを閉め、千反田が右手に柄、左手に鞘を持ってゆっくりと御刀を鞘か

ら抜き、途中で留めた…… 千反田と御刀の光がさつきより……

「凄い…… マーちゃんの部屋の時とは……」

「やはりこの部屋の中に…… だね、ホータロー……」

「そういう事になるのか……」

「エルさん、御刀から何か感じないか……？」

「なにか…… 振動のようなものを感じます……！ それに……」

「引き寄せられる感じか？」

「そう！ そうです……！ こちらです……」

古典部の俺たちが普段詰めているテーブルの場所の両側には全面ガラスの資料標本の棚が並んでいる。その東側のガラス棚の奥に間を空けて壁側にも資料棚が並んでいる。その中に……

「これは古そうだね……」

「木製の棚…… この中なの？ チーちゃん？」

「わかりません…… ただ、どうも…… ここでしようか？」

千反田の持った御刀の抜き身が指し示す先には一番奥の木製の標本棚。これも上部はガラス棚、下部は木製の引戸、真中も……

「……この引出しでしょうか……」

「ねね、何か感じるか？」

「?……ねね……」

「……そうか、でも開けてみるか」

薫が棚の引出し……三つある内の真ん中……を引き出そうとする……

「……鍵か……」

「……どうするの……!? いまさら鍵まで探すなんて……!」

「薫、いつものテ、だな」

「な、なんのことだ……? て……わかってんじゃないか……ヒヒッ!」

薫がどこからか取り出しまするは! 針金……

「やっぱり手癖が悪いな……薫の旦那……！」

「ああ、だからここでの調査はオレが選ばれたんだ……だが、この部屋は盲点だったぜ……一度は調べたのによ……」

「調べた、て……どんな風にだい……？」

「あのスペクトラムファインダー、まあ荒魂探知機だな……あとはねねだ」

「ねねさんが、ですか？」

「この端末とねねの鼻と耳を使って校内を調べてたんだ。今となつてはいい加減な捜査だったな……まさかこんな所に……」

「ねね……」

「開いた……よし！」

引出しを慎重に取り出す……テーブルに運んで中身を確認したが……

「ただの鉱石標本だね……」

「この中には……クソっ……！」

「ねねちゃんとその探知機は……？」

「反応が無い……」

「折木の勤もこれまでね……」

「ま……そういう事になるかな……」

「折木さん……」

## 第14話

「……クククン！ ねねっ!？」

「……おいっ！ ねね！」

ねね？ がさっきの標本棚に……ん？  
取り出した後の引出しの奥を……

「クンクン！ ねねっ!!」

「……そこか！ その奥に……！」

「あの引出し……そうか」

「奥行が……棚に比べて狭かったね……」

「あの時、わたし……」

「チーちゃん引出しを取り出してたとき、御刀を置いていたからね……」

棚の引出しの奥に…… 隠された引出しが…… 薫がそつと引き出してみる……

「……これは……」

取り出した引出しの中に…… 何か光るもの…… これは……

「これ…… なに…… ? マーちゃん……」

「…… アナログ式スペクトラム計…… 荒魂探知機だ…… こんなものが……  
こんなところで眠っていたとは……」

「アナログ式って…… ! じゃあこの光るものは…… ! 益子さん……」

「…… ああ、ノロだ……」

「この前里志がスマホで見せてくれたあれだな……」

「あれって？ 折木さん……」

「まさかホータロー……！ あの時から気付いてたんじゃ……！」

「まさか…… いくら俺の運がいいからといって…… 今夜現れた荒魂、御刀、千反田……」

「まあ刀使としてのだな…… とくればもう一つは……」

「…… ノロ…… という事か？ ホータロー」

「そうだ。まず最初の三つが揃ってようやく俺の勘が働き出したんだ……」

「ノロへの道筋をな…… 勝手にだが……」

「でも…… どうしてわたしの御刀が…… なんですか？ わたしにそのような能力でも……」

「いや…… 俺にもそれは…… ん？」

テーブルに置いてある千反田の御刀が…… 音を立てて震え出した…… なんだ……  
!?

「え……なに……？」

「千反田さん、触っていないよね？」

「え？ ええ……」

「……！ そうか！ このノロを……！」

薫がアナログ式探知機を御刀へと運ぶ……側に置くと……

「なに……これ……どうしたの……」

「中のノロさんが……暴れてます!!」

「いや……引き寄せあつてるのかも……」

「薫……これは……」

「オレも……初めてだ……じゃあ、これなら……」

探知機を御刀の上に置いた……ん？

「治まりました……」

「え……なに？ 中のノロが球体に……！」

「真ん丸だね……写真のように垂れ下っていない……」

「……おい……！ ノロが……！！」

「飛び跳ねてる……薫!？」

「ねねね??？」

半円形のガラスケースの中でリズムカルにピョンピョンと飛び跳ねるノロ……ユーモラスでもある……

「これは……凄いな……こんなもの滅多に拝めるものでも無いよ……」

「おう……こんな事って……里志……」

……俺達男共が宇宙的神秘の感に撃たれてる時……隣の連中は……！

「なんか……ヘンだけど……カワイーっ!!」

「そうですね!! とても喜んでいるみたいですよ!!」

「喜んで……そうか! このノロとこの御刀は……!!」

薫もお隣さんでした……

「この中のノロは……この御刀を造る際に取り出されたノロ……そのものだ……」

「そうなのか……? でもノロってというのは……」

「普通は玉鋼を形成させる時に抽出されるものだが……おそらくこの御刀を造る時、工業用鉄鋼に直接砂鉄を混ぜ込んだんじゃないのか……だから軍刀を造る工場か工房で

ノロが……」

「……それをこのガラスケースの中に、ということかい？」

「明治以降御刀を造る際には刀剣類管理局管轄の鑪場から刀鍛治に玉鋼を譲渡していたんだ。ノロを直接管理局を通じて祀るためにな。それ以前は鑪場の職人集団が自らの祠を建てて祀っていたんだが。その後玉鋼そのものも造られる事も稀になった……ノロの処理にも限界がきたんだろう。だが、昭和の初期……物資不足で軍刀用の鉄鋼も不足して……止むを得ずこの国の砂鉄を……という可能性も……当時は違法行為だったかもしれんが」

「……そうなのかい？でもこのノロはなんでここに……どうしてこんな事になったんだろう……」

ホータローは……？

「もうこれ以上は俺にもお手上げだ……どこかに資料でも残ってなければな……」

「ねえ……私の漫画的想像力でもいいなら……こんな事もありえるかも……」

「……言ってみてくれ……摩耶花……さん……」

「御刀って、男の人が持っていて、刀使としての能力は目覚めないんでしょ？」

「ああ、そうだ」

「昔、この御刀が……軍刀としてだけど……チーちゃんの家を持ち込まれた時、チーちゃんの家の人……誰か知らないけど……触っちゃったんじゃない？ そしたらその女の人……刀使としての能力に目覚めちゃって……それからこの御刀を蔵の中でずっと保管していたとか……」

「なるほど……ありうるかも知れん。千反田さんも刀使の能力を持っているなら遡って……さっきの話のように嫁入した誰かの家系で……」

「で、このノロは？」

「オレキ……突っ込んで来るわね……その事情を知って、この御刀を造った職人さんがノロもチーちゃんの家を持ち込んで……」

「で、この高校に？」

「分かっているわよ……何らかの理由でこの高校の地学準備室に隠しておいたのよ……」

「満足!?!」

「はは……そういう想像もあり得るかも知れないけど……しかしまた地学準備室とはピッタリな

「隠し場所だよね」

「…：… そうでした！　なんでここなんですか!?　折木さん！

どうやってここを特定出来たんですか!?　わたし、気に…：…」

「…：… お前以外はもう気付いているみたいだぞ…：…」

「へ!?!　そんなんですか？　薫さん？　摩耶花さん？　福部さん??」

「チーちゃん…：… 私もあのノ口を見てから気づいたの…：… ノ口って砂鉄から出来るで  
しよっ?」

「はい!」

「……だから鉱物資料も置いてあるここ地学準備室に……てこと……」

「……ええー!! そうなんですか!?! ……そうですよ……  
折木さん!! どうしてもっと早く教えてくれなかつたんですか!!! ……」

「……いやお前だつて聞かなかつただろ……ナンダそのプクーとした頬は!!」

「……チーちゃん声……!」

「はっ! ごめんなさい……! でも……」

「……まだムー！ と睨みつけるか……！ かわいいモンだが……いや俺は悪くない、  
い、

ここに隠した奴が悪い！

「……隠した、というなら根拠が無い訳ではないな……機械式の荒魂探知機が開発された時、それまで使っていたこのアナログ式の探知機……つまりはノ口を管理局が強制的に回収したことがあるしな……」

「それは何年前だ？」

「二十年前だ……」

「じゃあ少なくとも二十年前にここに隠されていることになるね……管理局から隠すためか、砂鉄入りの軍刀を造ったことを隠す為か……」

「この校舎もたしか二、三十年前に建替えになったって言ってたよな。これを収めていたこの木製の標本棚……前の校舎から運んだ物かも知れんし」

「それにです……！ 母方の……わたしの叔父も……この高校の出身……ですか

ら…… 他の身内も……

かもしれません……！」

「つまり、伊原のマンガ脳の可能性も捨てたもんでも無かった。よかったな」

「なによ！ バカにして!!」

「摩耶花さん……！ シーですよ……！」

「……ウン…… オレキッ!!」

おう…… これ二人目か…… 真実を話すにもリスクが伴う、ということだな……  
慎むべし慎むべし……

元ネタ

校舎の建て替え

わたしの叔父

第5話

第3・4・5話

## 第15話

「あとは……この二つをどうするかだ……」「ねね……」

俺達はここ薫の寢床に戻って思案にくれている……この御刀、ノロ、そして千反田の事……今夜現れた二つの荒魂を薫一人で鎮圧したと管理局の現場担当者に報告してしまつたため、地学準備室で発見したこのノロ……アナログ式探知機と、千反田の家の蔵に眠っているはずの御刀……観た目は軍刀……を改めてどう管理局側に説明すればよいのか……ここはいつもの薫の手癖の悪さを利用して……

「……御刀の事は無かつた事にするには出来ないのか？」

「……それではこのノロと御刀は!? ……離ればなれになってしまうのではないですか……？」

「……そうよね……せつかくまた出逢えたというのに……」

「それにこのノロ……管理局に没収されたら、どうなるんだい？ 益子さん」

「おそらく……他のノロと融合されて……祀られるか研究材料にされるか……」

「ではもうこの御刀とは……！」

「融合されて個性を失ったら……この御刀との共鳴関係も……だね」

これまで玉鋼と分離されてきた多くのノロは御神体として祀られるたびに各々の祠の寝所で融合され、元の玉鋼との親和関係を失っていったという。『彼ら』は祀られることで元の玉鋼から分離された『寂しさ』を慰撫されてきた存在なのだそうだ。

「でもこのノロさんは……この御刀となら祀られる必要はないようですね……」

「だがこれが今回の荒魂騒動の大元になった原因だ。確認した以上管理局には報告しなければだな……」

「なんとかならないのかい？ 益子さん……！」

「オレの伝手を頼るか……オレの知合いにも話の分る奴がいる。そいつ等に頼めば……」

薫が端末でどこかへ連絡を取り出した。話は直ぐ付いたようだ……

《コンコン!》

「おう、入ってくれ…。」

「… WOW!! ヒサシブリだネー!! カオルのダンナサマー!!」

ギューツ! 「ねねー!!」

「お、おう…。」

…  
突然乱入してきたこの外人…  
いきなりアメリカンなフレンドリーさを発揮している…  
何者だ?!

「… OH! 君たちは何者かネ?」

こっちの科白だ…  
いきなり場違いな外国の爺さんが入ってきたら俺達田舎者は戸惑うしかない…

「いきなりだな… やっぱりにここに来てたか爺さん…!」

「さっきここでの荒魂発生の報告を受けてネ! 美濃関の研究所にいたからヒトツトビだヨー!!」

「なら話は早い、これを見せてくれ」

「OH! これワ!!」

「折木さんが発見したんです!!」

「W H O ? オレキ??」

馬鹿っ千反田!! ここで俺の名前をだすな!! 話がややこしくなるだろう!!

「: : : キミがソのオレキ君と言うのかネ?」

「え: : : ええ: : : そうですね: : :」

ややこしくなったじゃないか: : : 俺は英会話は: : : !

「W O W ! W O N D A R F U U L !! キミがアノ有名な名探偵折木コゴロウ君だネー!!」

「ホウタロウです: : :」

俺にはアメリカンなシェイクハンド: : : 千反田並のP Sの無さ: : :

「ナルホド: : : キミ達が報告にあつたスコンプ! の皆サンだね! 報告通りだよ!」

コテンブだ……薫のヤツどういふ報告をしたんだ……！ 名探偵だど!? 俺にはそんな面倒な肩書きなど要らんわ!!

「こんにちは！ わたくしがこの古典部の部長千反田です！ えーと……？ お名前は……？」

「ああ、この爺さんフリードマンていうんだ。博士でいい……」

「はい！ では博士！ あとこの二人も古典部の部員なんです！」

「えーと……初めまして……伊原摩耶花です……」

「僕は福部里志といいます。よろしく！」

「ヨロシク頼むヨー！ では本題だ！ あとはこの御刀だね？」

切り替えの早い爺さんだ…… 御刀を手に取ったな……

「刀の見分け方は分からないが……確かに普通の御刀とは違うようだネ」

「昭和の初期に造られた物だつて益子さんが言ってたよ」

「Oh……昭和……コレが……これを視たまエ君達」

「これは……なんです？」

爺さんの取り出したのは…… 薫の端末と同じくらいの計測器？ 画面に数値が……

「玉鋼のパーセンテージを測っているのだヨ。これによると…… 20%ぐらいかな？」

玉鋼を混合させた物ではないようだがネ」

「ではやはり砂鉄から…… ですか？ 博士？」

「そうだね…… 玉鋼からだとかんなに巧く鋼同士が融合出来ないからネ」

「では薫さんの見立て通り…… 製作過程でノロが抽出されたんですね……」

「それがこのノロだね…… これを発見したのが……」

「ハイ！ この折木さんです！」

「…… どうも……」

ハア…… どうしても俺の順番が周ってくるのか…… ここは一つ、しなくてすむ説明は省略し、しなければならぬ説明は手短に…… だな。

「…… つまり、キミはこの御刀を使ってこのノロを発見に導いたわけだね？ よく気づいたヨー！ マサカ御刀ではネ！ キミが持つてかネ？」

しまった……ここで千反田の能力の存在を明かしていいものなのか……もし管理局の関係者に知られたら……

「博士、わたしです……わたしがこの御刀を持つて場所を特定しました……！」

「そうだ、爺さん……この千反田エルさんがこの御刀と……刀使の能力を使ってこの探知機を見つけたんだ……方法を思いついたのはホウタロウだな……」

千反田……自分から明かすとは……後が面倒になるかも知れんのに……自覚がないのか……？

「キミがかね……？ ウム、でもキミは刀剣類管理局に刀使としての登録はしていないのでワ？」

「……！ はい、そうです……いけませんでしたか？」

「マァ！ 突然能力に目覚める事もあり得る事だしネ！ 気にしないでくれたまエ！ では、早速その能力を見せてくれないカナ？ 千反田クン！」

アツケラカンだ……この人なら信用してもいいのか……？ 千反田、御刀を構えたな……

「電気を消すぞ」

「……OH……ナルホド…… コレは…… コレでキミはもう一体の荒魂を鎮めたのだネ」

「……マーちゃん！ 言っちゃったの!!」

「……いや、オレは…… 爺さん!」

緊張か今まで黙っていた伊原が叫び声をあげた……俺も驚いたが……

「カオル君、キミの御刀の斬れ味はどうにお見通しだヨ。グランドの荒魂はキミが鎮めたガ、北の校舎の荒魂の斬り口は違う。御刀の長さでだネ」

この爺さん……やるじゃないの……

「わたしは……」

「爺さん！ エルさんは何も憶えてないんだ!! このことは……!!」

「安心したまエ！ 悪いようにはしないヨ。結果オーライならそれでヨシ！ HAH!  
HAH! HAH!!」

確かに話は分かりそうだ。それでは……

「フリードマンさん……これからどうすればいい……ですか？ 俺達としては、ノ口と御刀を離したくないんです」

「……そうですね！ この二人は数十年ぶりに再開したんです！ これを引き離すなんてこと、

わたし……!!」

二人は……ね。千反田の奴相当入れ込んでるな……

「マアマア待ちたまエ！ とにかくこのノ口と御刀の共鳴も観察して観ようじゃないか  
！」

さっきのように御刀の上に探知機を乗せてみた……

「…… W O O O O O W !! コレはワタシも初めて観るヨー！ 確かにこのフタリは引き離せないネー!!」

「…… よかった…… よかったですね！ 折木さん！」

「ん？ ああ…… よかったな……」

「この二人を引き離すなんてヤボな事はしないが…… でも一つ気になる事がアル」

ナンだ…… 気になるって…… 俺その言い回しに過敏になっているのか……？

「マアいい！ 研究所で調べれば……」

「なんですか!? その『気になる』って!! 研究所で調べてたらここでは解りませんよね!!

それでは気になります！ 博士！ 何が『気になる』んですか?? わたし…… 気になりますっ!!」

元ネタ

スコンプ……（酔昆布……） 第3話

氷菓の舞台の架空の街『神山市』のモデルは岐阜県『高山市』だそうです。美濃関も岐阜県ですからヘリコプターならヒトツトビですかね。

……  
けっっこう距離がありました。

## 第16話

「…… O、OH…… 何事かネ…… その目の輝きワ……」

…… やらかしたな…… 国際問題だ……

「…… すごい…… あの爺さんまで黙らせるとは…… 流石チタンダの旦那……」

「確かに！ あの目からは逃れられないんだよねー！」

「…… 私だけなのね、あの目のお世話になって無いの……」

「つまり、キミが気になるのはワタシの気になるコトだね！ ヨシ！ 説明だけならしてみよウ！」

「わあ！　ありがとうございます!!折木さんも！　よく聞いて下さいね！」  
「なんで俺が……」

「ワタシが気になるのは……　これがいわゆる共鳴とは異なるのではないか？　と言う事だヨ。ここでの共鳴というのは……　刀使と御刀との関係の事かナ。本来異質な物でも響き合う……　説明が難しいネ……」

「なんとなく……　わかります！　身体と御刀の響きが一致する！　と言いますか……　薫さんは？」

「オレは子供の頃からだからな……　気がついたら出来たたという感じだ」

「ソウ、ワタシは刀使では無いからその感覚は分からないガ、刀使達の聴き取り調査ではその様に表現する子が多かったネ。その共鳴感覚の関係が刀使や御刀双方の能力を相乗的に引き揚げ合う、ワレワレはそういう研究も行っているんだヨ」

「でも、このノロと御刀との関係はそうでは無いと言うのですか？」

「そうだね。何せ初めて観察された現象だから研究所でジックリと研究しなくてワ！　腕が鳴りますヨー！」

「折木さんはどう思われます!？」

「……俺は靈能者でもなければ専門家でもない。管轄外だ！」

「でもキミはこの御刀とノロとの関係に気づいてこの探知機を発見したのではないのか  
ネ。名探偵クン？」

「…… あれは運だ！ 勘だ！ 湿布に膏藥だ……！ 俺は知らん!!」

「冗談じゃ無い……！ 名探偵なんて風評被害…… よし！ 思い付きで俺の名誉に  
傷をつけてやろう……！

まっつてろ二人とも……!!

「コホ…… じゃあ千反田…… そこまで言うならしてもらいたい事がある」

「ハイ!!」

「OH！ ナンナリト!!」

爺さんまで…… この二人は似た者同士だな……

「さっきのように御刀を構えてくれ…… 薫、電気を」

「おう！」

「また消すのかい……」

「千反田特製の人体放光器があるだろう」

「折木……少しはチーちゃんに気を使いなさいよ……」

「ウフフ!!」

伊原が珍しく気弱だな…… 口数も減ってきたし…… 単に眠いだけか…… もう深夜の二時だな……

「どうですか?」

惚れぼれする様な幻想的な光景だが…… まあ俺も試したかった事だ。短かったが名探偵の名誉もこれまでだな……

「爺…… 博士、この探知機を御刀に付けてみてくれませんか?」

どうせ思い付きだ。結果が出なくてもそれはそれで万々歳だが…… ん!?

「……これワ……オレキ君！ キミは大した大名探偵クンだよ!!」

「どうしたの……！ チーちゃんの光が……」

「……真っ暗になったじゃないかつ!! スイッチはっ!？」

「わたし、どうしたんです??」

「おう……」「ねね……」

ピンゴだ……なんでだ……俺の素朴な疑問がこんなことに……

「オレキ君！ コレはどういう事かネ!! ワタシにも理解出来るように説明してチョウダイ!!」

博士……その言い回し……もうヘンなガイジンですよ……それにアナタは専門家でしよう?

……まあ、しいて説明するなら……

「共鳴……では無く、中和……ですかね」

「……ソウカ!! ワレワレが研究しているノロの無害化……

コレがヒントになるかも知れない……!!

UNBELIEVABBBBBLEEEEEEEEE!!!」

「折木さん……??」

「……どういう事だい…… ホータロー……」

「俺にも…… あの喜びようは理解できない……」

「アンタに聞きたいのはそうじゃなくて……!」

「千反田さんの光が消えた理由だな…… ホータロウ、心当たりは?」

「もう疲れた……」「ねね……」

…… 嵐のように現れたじい…… フリードマン博士はノ口と千反田家の御刀を携え  
（こ）を後にした……

「薫…… 本当に大丈夫なのか？ あの爺さん……」

「ああ多分な…… 組織への裏工作ならあの爺さんとはよく組んで暗躍していたもんだ」

「マーちゃん…… それ機密事項じゃない……？」

「今はオレ達が主流だ…… どおって事ない！ ヒヒ！」

「千反田さんの処遇はどうなるだろう……」

「そのうち鎌倉から関係者がエルさんの家に来るだろうし一二回は鎌倉か美濃関にある  
研究所に脚を運んでもらうことにはなりそうだな。ま！ 悪いようにはしないさ」

「そーいや千反田は？」

「寝てる……」

薫のベッドの上で仰向けにスースーと……なんてまあ無防備なこと……  
原はベッドに背を、

里志と俺は向いの壁に身を委ねて床に腰を下ろしていた。

「『写シ』や『迅移』は結構体力を消耗するからな。今日初めてにしてはな……」

「もう三時ぐらい……?」

「明……今日の学校どうしようかな……」

「あれほどの事があったんだ……休校だろう……」

「さて……そうは問屋が卸すかな……」

「どういう意味だ……薫……」

「知らん……オレももう寝る……」「ねー……」

それから俺の記憶が途絶え……ん……? いま何時だ……?

「おい…… 足音が……」

「話し声も聞こえるね……」

「ねえ今何時よ……」

「おう…… 7時45分ぐらいだな……」

「45分……？ おい……」

「…… ちよつと!? ホント? なに!

チーちゃん起きて!!」

「お、おう…… オレ外見てくるわ……」

結局一晩丸々ここで寝泊りか…… 計画では朝四時半頃を見計らって各々帰宅する算段じゃなかったのか!?

「…… みんな普通に登校してるぞ…… 何事も無かったみたいに……」

「おいまで……! じゃ俺たち風呂も着替えも朝飯も無しに教室に行くのか!?

「えー…… 今日休校じゃ無かったのかい……?」

「そうなの……!?! …… つ!! イヤ〜つ!! 髪の毛が〜つ!!」

「…… どうしたんです? 皆さん……??」

皆遅刻することはなかったが…… 本当に何事も滞りなく今日もまた一日が始まろう  
 としている……

何故!?

「…… 益子君…… はいとしても、折木!! 千反田まで…… !!何だ授業中その眠そう  
 な態度は!!」

先生まで事情を知らないのか…… ? 俺たちは昨日何を見たんだ? あれは全部夢  
 だったとでもいうのか…… ??

「ねーねー薫ちゃん! 何かタベ荒魂がこの辺りで出たみたいだけどそれでそんなに眠  
 たいのー??」

「お、おお…… だがその事はシート! だな!」

「…… キャー! 極秘任務!? なんかカツコいー!!」

…… 噂は流れている様だがもうこれじゃ天災か何かだな…… 地震雷火事荒魂……

親父の威厳はどこへいった…… !?

『マア今回の事ワ、このワタシが何とかシヨウ！ 調査報告書にチヨチヨチヨイツ！  
てネ！ 全てが上手く行くはずダ!! このグランパーにマツカセナサーイ!!!』

…… その結果がこれなのか……？ 教室の連中はおろか、テレビ、新聞に至るまで  
昨夜の事は何事も無かったが如く当り前のように物事が進んでいる……

「…… まあ、これがオレたちの遣り口だ…… 気にするな！ そのうち慣れる！」

放課後ここ古典部の部室……昨日の一件の始まりは当にココだった！ というの  
に……実感が湧かない……

「……よかった……！ あれは夢じゃ無かったのねー！」

「ホントは夢の方がよかったんだけどね……」

「ここまで何事も無かった事になるなんて……俺は正気か!? て思ったぞ……」

「昨日はちゃんとあつたんですよ??」

「ああ、校舎の破損とか目立った痕が残らなかったからな。ノ口の回収も急がせたよう

だし」

「ねね！」

……これが薫の組織の『いつもの手』の威力なのか……購買部からの横流しといい  
刀剣類『管理局』の底知れぬ闇を改めて覗き込んだ気がする……

## 第17話

それから一週間後、薫は消えた。とはいえ突然には無い。あの一件の後、上からの命令でここ神山高校での一週間の待機命令が出たのだ。

『昼間は御刀を装備して、夜は外して離れた所に置いて寝床で過ごすんだ。これで何も無ければ原因は特定されたことになる……』

この一週間も何も滞りなく進み、放課後も部室でティータイム……荒魂も現れる事なく薫にとっては何気兼ねなく過ごせる最後の時間となった……

『おう、じゃあな!!』『ねねっ!!』

俺たちとの別れも素っ気なく、部活時間終了後アイツは高校を後にしていった。千反田は泣きじやくり、伊原も泣きながらも千反田を支えて薫を部室から見送っていた。俺たち男共は……

「……なんか、呆気なかったね…… まあそれが益子さんらしいんだけど」

「まあな。これで俺たちはまた四人か……」

感慨は残る…… ただ、薫の俺に対する態度はこの一週間の間に少なからぬ変化があると感じていた。

『おう、これホウタロウのだ……』

『お、いいの?』

『ああ! オレの特権で二人分手に入ることになった! もう少しで終わりだけだな……』

昼食時にサンドイッチやチョコパンなど……購買部でもレアな物資を『管理局』の権限で俺の分まで調達してくれるようになった。しかもタダだ……！これで俺もこの『組織』の内側の人間として認知されているのかも知れん！他にどんな特権が……何て冗談だけどな。さらに……

『おう、ホウタロウ……オ……わ……たし……のこの制服姿……まだ中学生……ぼいのか……？』

『んーそうかー？ だんだん着慣れてってないかー？ もうすっかり板に付いてるぞー』

『そつ！ そうか……！ それなら……それで……フウ……』

『おう』

「まあ、アイツはアイツなりに残り少ないここでの生活を惜しんでいたんだろう……俺でも気晴らしの相手ぐらいにはなってやれたかな」

「……………ハア……………」

ん？ 何だ？ 里志と伊原のヤツ、溜息の後にジトつとした目で俺を眺めよって……！

「ホータロー……それは随分……アレだね……」

「オレキ……まあアンタに期待するだけ無駄ってことね……ね！ チーちゃん！」

どういふことだ！ 俺のような常識的な高校生を前にして……！

「えー……つまり、どういふことですか??」

「チーちゃんまで……」

て…… 千反田も俺と同類ということか……？ 否！ 否！ 三たび否……！！

しばらくして千反田が美濃関にある特別希少金属利用研究所という機関に呼ばれ、あの博士とも再開し臨床実験に参加したそうだ。詳細は述べられないとの事だが、帰ってきて古典部の部室で和氣藹々と事の次第を語っているところをみると大して危険な実験でもなさそうで俺たちはホッとした。ただ千反田自身は刀使としての能力は認められたものの、管理局には登録しないとのこと。対になる御刀が例のノロとの中和関係にあるため御刀、ノロ、千反田と三点揃うと……薫の寝床でのあの実験の様に……千反田の刀使としての能力が発揮出来ないのが理由だ。

『御刀にモ、対になるノロを求めて荒魂を探しまわる欲求がある、という仮説が証明される。そうなのだヨ！ その欲求が人の身体を通じて……つまりヒトのカラダを借りて荒魂……ノロを探し求める……その身体と一致した少女が刀使として荒魂を鎮める……しかし御刀自身ワ……』

『いつまでたつても自分と分離したノロさんに出逢えないのですね……』

『ダカラ！ 今回のこのケースはとても特別なのだヨ！ 御刀とそのノロが製造工程で分離したというのがだね。数十年前の違法行為とその隠匿が今になってこんなに重要

になるなんて！ つくづく不思議な縁だヨ！ キミ!!』

地学準備室での探索の折も、薫の端末やねね？ の鼻も効かなかったのも準備室にある多くの鉱物標本がノロからの放射物に干渉を与えて正常に探知出来なかったからだそうだ（荒魂と御刀は嗅ぎ付けたが……）。隠した人物はそこまで見越していたのか…… 今となつてはその経緯は不明だが、隠したいだけでなくいつかは見つけてもらいたい…… 地学準備室にノロを隠したのはそんな相反する動機からではないか？ …… とは博士の弁である。そういえば薫の奴は……

「美濃関には…… おりませんでした…… もうすでに別の任務で全国を走り回っているそうです……」

あ！ でも！ 博士の孫娘さんには出逢いましたよ！ 研究所でわたしの顔を見るなり飛んできてわたしに抱き着いて来ましたから!! うふふ!!」

あああの薫の言っていた『すぐ抱きつく金髪』のことか……？ あのグランパ爺さんの孫娘の事だったのか……

「皆さん！ 薫さんからこの様な物が届きましたよ！ …… 为什么呢？？」

…  
放課後部室で千反田が取り出したのはUSBメモリ？ 千反田は携帯は持って

いないがパソコンでメールやネットの検索ぐらいはしているらしい。だがそれ以上は…… もつとも俺もリビングのパソコンでネットぐらいは弄れるがそれ以上の事は苦手だから必要な時は里志に任せっきりになる。つまり、俺と千反田はほぼ同世代人物と  
いうことになるな……」

「うん、僕のパソコンで何とかなるよ。千反田さんもホータローも少しは情報でパソコンに身を入れたほうがいいね」

「必要な技術は適当に、いらぬ技術は人任せに…… が俺のモットーなんだが？」

「ははっ！ 違うないね！ それでもホータローの人生通つてしまえばそう感じるが  
すげどね」

「単に物臭なだけじゃない…… ダメよチーちゃん！ コンナのに感染しちゃー！」

「なんか出ましたよ！」

「これ、原稿じゃないかな？」

「え！ これマーちゃんの!？」

「おい…… 結構分量あるぞ……」

薫が千反田に送りつけたのは学園祭に出す古典部の文集『氷菓』の原稿だった。部長の千反田の家にパソコンが有ることを知らなかったため郵送で送りつけて来たのか。しかし原稿のポリユームが……

「……すごいですね！」

「こんなにかけるなんて！」

「さすが始末書で鍛えられたことはある」

「アンタは社会に出たら毎日でしょ！」

『特撮における英雄像とその変遷・敵役の犯罪思想の時代的意義……』

昭和の特撮映画、テレビ、現代のアニメに至るまで……名作を中心にスーパーヒーローの遍歴とその英雄像、戦法やシリーズ全体のストーリー展開、時系列で見た被り物スタイルの変化など……あれから二ヶ月、二学期の始まった頃までにこれほどの原稿を仕上げてくるとは……俺はまだ何も手を付けていないぞ……！

「この原稿……これだけでも文集にしたら去年の厚さ位にはなるわね……」

「省略してしまうのかい？」

「そんな… 勿体無いです!!」

「いつその事今年はこれだけ載せて特撮特集にでもすれば…」

「却下よ!」

何だ伊原の奴部長でもないクセに… でもこんなもん見せられたら何か書かなければならないという義務感というか… 促されるな…

「… よし! 僕も趣味を丸出しにして『19世紀西欧におけるダンディズムとファツシヨンの推理小説への影響… ホームズとデュパンを軸に…』なんて物を書いてみるかな!」

「ふくちゃんがそれなら私は… 『70年代少女漫画に診るジェンダーのゆらぎ』ってのはどう!」

「わあ! すごいですね! ではわたしは! 『テレビ時代劇・鬼平犯科帳・民放時代劇のターニングポイント』というのはどうでしょう!!」

折木さんは!」

… おい… なにヤル気になっているんだ… それに里志! ここ古典部では活

字中心のメディアで……とか言っただけだ？ 俺はそこまで考えていないぞ……！

……俺は……そうだな……この現代社会に武者修行で全国を行脚する孤独な高校生剣客がとある高校で化物を退治した御礼に妙齢の美人校長の家に寝泊りしながら校舎に巣喰う学校の妖怪七本槍との対決に挑むという……しかもイケメン剣士だと思っただけで校長が自宅に寝泊りさせていたが実は……結果この二人に禁断の愛が芽生えて仕舞い……ウムム」

「折木さん??」

「アタタにブツブツ言ってるの!？」

「……いや、なに……」

妄想がただ漏れに……まあこのぐらいの想像力、健全な男子高校生なら当然だよな……??

「ひょっとして創作小説かい？」

「小説!! いいですね! 今年の騒動をヒントに高校を舞台にして薫さんをモデルにした主人公が剣を振るう……そしてその校舎の中にはお宝が……! さらにそのお宝には悲しい歴史が……折木さん! 是非それを小説にしてみてください! わたし……内容が……気になりますっ!!」

「……俺の文集のテーマが確定してしまった……まあ軽いラノベ風にすれば書けないことは無いかな……千反田の好みに合わせてラノベの例の『お約束』は無しだが……」

「……ならついでに題名も考えてくれ……題名があるだけでも話の展開がし易くなる……」

「アンタ……どこまでも他人任せなのね……」

「まあ、本文を書くのはホータローだし、小説としては処女作だろ? 後の大文豪様折木ホータローの影に美人部長の助言あり! 自伝には同じ部員だった僕達の事も匂わせてくれよね!

「ホータロー!」

「なに好き勝手なことを言う……!」

「これはどうでしょう!! タイトルはまだ決まりませんが副題は!

『引き出しの奥の記憶と孤独……』では!! あのノロさんの見つかった所です!!」

「うん、いいんじゃないかい? ホータロー!」

「後はアンタがちゃんと書けるかよねー……」

「ぜひ! お書きになって下さい!! 折木さん!!」

……はあ…… 姉貴よ…… 俺はただここで本を読むだけでよかったはずじゃなかったのか……? 姉貴には格闘技で脅され、里志には校内に個室が出来るかと担当がされ、千反田には出逢ったとたん金縛りにあわされ、伊原にはオマケのクセに嫌味を言われ続け…… とうとう小説を読むだけでは無く書くことにまで…… 俺の高校灰色計画、どこでどう間違えたのか…… フウ……

## 第18話

「とんだ大役を仰せつかったね。ホータロー」

「ハア、小説か……軽い物ならいけるかな……」

「ホータローは純文学、ミステリー、歴史物、ライトノベルまで手広く読んでいるからね。いずれは何か書くことにはなったはずなんだよ。千反田さんと出逢った時からね」

「おう何だ、全てを見通す様な事を言つて。推理のつもりか？」

「そんなつもりは無いよ。ただ、益子さんのあの原稿が送られてきてふと二ヶ月前のあの事件の事を思い出したんだ。ホータローがこの高校に入学して古典部に入学してからこれまでの事はここに至るまでの符合だったのかな？　つてさ」

部活からの帰り道、里志との何気ない会話がまたも文集の原稿の話になる。もう忘れて眠りたい……

「ほうそのココロは？」

「地学準備室でホータローと千反田さんがノロを発見しただろう？ この事実を逆算してみたんだ。そして時系列に沿ってこれまでの事件を並べてみると……」

「どうだつて言うんだ？」

「全ては千反田さんがこの高校に入学して古典部に入部した事から始まるんだ」

「……なんだ、それ……堂々巡りじゃないか……そのお陰で俺はいろいろと面倒を押し付けられて来たんだ……！」

「ホータローは気付いていない様だね。ま！ 僕のこの推測もこじ付けみたいなものだからさー」

「続けるよ……」

「まず部室の場所だよ。今は地学準備室だけどその前は生物準備室だったんだよね？」

「ああ、今は壁新聞部だな」

「千反田さんや僕達が神山高校に入学する一年前に部室が代わったとのことだけど、これを単なる偶然と観るか、何らかの符合と観るか、それでここまでの経緯が偶然の羅列

か必然の積み重ねか、判断の別れるところなんだ」

「里志、言い回しがな……でも何となくお前の言う事も分かってきたぞ……」

「そうか、そうだよな……そういうこともあるかも知れん……」

「でも一年前という処がね……入学した年から！……だつたら僕の説ももつと説得力があつたのに……」

「はは！」

「こういう発想は俺には浮かばない。周りの連中の指摘する俺の『推理』という物が俺にとつては『運』でしかないように……千反田と俺達、部室としての地学準備室、そして薫……これらが時系列的に絡み合つて二ヶ月前のあの事件の収束……これは……」

「まあ言うなれば、『縁』かな？　そう思わないかい？　ホータロー」

「『縁』か……そうだな。あの時の事はそういうことにしとくか」

「全ては千反田の古典部への入部……だけで無く、俺も姉貴に脅されて入部を余儀なくされた事も絡んでくる。初めて部室で出逢つた時事件？　が発生し俺は初対面の千反田にアノ目で金縛りを喰らわされた。里志曰く、あれ以来俺の『隠されていた興味深

「才能」とやらに目覚たらしく、それからというもの千反田の好奇心とアノ目と金縛りによつて様々な疑問を解くことを余儀なくされた。特に千反田がこの高校に入学した個人的ないきさつに絡む事になった時は……千反田や俺だけで無く里志や伊原をも巻込んで恰もパズルのピースが組み合わさる様とその概要が明らかになった事もあつた。これだけでも里志の言う処の『縁』だか……」

「千反田の叔父さんのケースの時はその『縁』が四十年前まで遡る事になるね。二ヶ月前の時は……七、八十年前までの『縁』が絡んでくるんだ。僕達が出逢つたのもそんな『縁』や数多有る『縁』によつて絡みながらなのかも知れないね」

「腐れ縁もな……『出会う必要の無い縁はそのままに、出会わなければならぬ縁もそこそこ』を俺のモットーに付け加えておこう。サンキューな、里志」

「はは…… ホータローらしいね！」

「…… 事のついでに言っておく…… 里志、喜べ。伊原は将来有望だぞ……」  
「なんだいそれ?!」

「こんな会話をしながら俺達二人は帰路を別れた。まだ暑い……でも少しずつ日が傾くのも早く感じられる。文化祭か……あと一月、もう一月か……締切に追われる日々

がまた今年も訪れたんだな。これも里志のいう『縁』のなせる技だというのか……まあいいさ。これまでの事は俺がこの小説を仕上げるための仕込だと思えば……でもこれが過ぎ去っていてもこのことが次の伏線となりそしてまた……もうやめた。今は小説を仕上げることを考えよう。考えずに済む事はやり過ぎ、考えなければならぬ事は運まかせ……だな。ウム。

良きかな良きかな……

## 『引出しの中の記憶』

終

元ネタ

生物準備室↓地学準備室 第3話

千反田、折木の入部く千反田の叔父

第1・3・4・5話

以上を以ちまして本SSは終了します。

読者の方々、筆者の自己満足の物語に付き合っ下さりありがとうございます。

今の所、内容は……ですが、とにかくこれが文章として成立っているかどうかを知るのもここに投稿した目的でもありますので

それでも読んで下さる方々がおられるというだけでも目標は達成されております。

(成立っていると勝手に思いこんでいるのですが)

内容も文法も細かい事を挙げてみればキリの無いほど至らない処が多くあるかもしれませんが

読んで下さった方々の暇潰しにでもなって頂けたなら幸いです。

ありがとうございます！









『  
・  
・  
・  
・  
お料理研究会恒例！  
文化祭特別企画『ワイルドファイアー!!』  
・  
・  
・  
・  
今年

の優勝者は……？ ……天文部!! 『暗黒舞踏の食卓！ ブラックホールへの誘い!!』  
!! 皆さん拍手!!』

グラウンドでの実況がここ古典部の部室にまで響く……今年優勝を逃したか。古典部二連覇ならず！ 里志の奴悔しがつているかな。まあ今のあいつはそんなタマじゃ無い。こういうお祭り騒ぎを思う存分楽しむ事があいつの今の性分みたいなものだからな。

さて、姉貴の弁当も食べ終わったとこだし、客の入りも落ち着いてる。ここは一つ居眠りとするかな……

今年は去年の様な惨劇にはならなかったし、この『氷菓』の売行きも好調だ。薫の原稿がページの半分近くを占める特異な文集になったが……俺たち残りの部員の原稿がまるでオマケのような扱いだな。お陰で今年の文集の厚さは去年の倍以上になってしまったが……

薫の奴まだ忙しいのかな……伊原とはメールのやり取りはしているようだが……文化祭の内の一日も休みが取れないとは……やはり管理局はブラックということだな……千反田もスカウトされずにすんだし……ふわああ……



．．．．．つたね！．．．．．ここでもチョコミントが食べれて．．．！．．．．．あれは！．．．．．たまたま売り子とすれ違ったから仕方なく買ってあげただけだ．．．！

．．．．．わたしは．．．．．ふつうのクッキー．．．．．食べたい．．．．．そう？　じゃっ！  
帰ったらまたいっしょに作りましょ！　フフツ！　．．．．．ホカに比べて辺鄙なところ  
デすネー！　．．．．．まあそういうな！　この部屋がこの高校でのオレの城だ！！」

．．．．．ん？　客か？　．．．．．オレの城って．．．．．この声．．．．．はっ．．．．．!?

「……おい……！ 薫！ 薫なのか！！ お前さんの連絡も無しに……！！」

「おう！ ホウタロウ久し振りだな！！ お前一人か？ 他の……」

「WOOOOW!! アナタがアノ!! ココでの事件を解決した名探偵!!」

明智ホータローデすネーッス!!! 逢いたかったデース!!!」ギョッッ!!!

……っ！ うわっ!! おいつ!? コラっ!!! ナンだ!!

またアメリカンなボディートークかつ!! ってこのキンパツ…… あのグランパの孫

だな!!!

俺はオレキだっ!!

「……部屋が……ですよ？　……っ!?　薫さん……?  
薫さんですよねっ!!　久しぶりです!!　逢いたかったですっ!!  
……ここに来る事どうして黙ってたんですか!?!」

「おう旦那！　ハハっ!!　そこはそれ、サプライズってヤツよ!!  
伊原の旦那にも口止めしてもらってな!!」

「マーちゃん!! 久しぶり!! ね! チーちゃん驚いてるでしょ!!」  
「久しぶり! 益子さん! この方達がお仲間さんだね?」

「おう! この日のために皆んな有給を貯めてくれてたんだ! オレが一寸したインテリである処をな!! っつてホウタロウ! …… 旦那も好きだねえ…… ヒヒっ!」

「…ん? そういやこのキンパツ俺が椅子から身を乗り出そうとした瞬間に抱き着いてきたな…… ということは…… ohh……!」

「うわあ! エレンさんも! お久しぶりです!!」

「で、オレキ、アンタ何でそんなイイ思ってるワケ?」

「そうだね! ここは一つ説明してもらわないと!」

「わー!! この人が名探偵?! コロン君なの?! すっごくいい!!」

「おい…… ここは米花町じゃ無い……! それにあの子は小学生だろ!」

「ああ…… またウチのエレンがご迷惑を…… フフツ!」

「男の人にとってはご褒美…… 薫がそう言ってた」

これはご褒美なんてモンじゃ無い拷問だ！ まあ一寸計り男の願望も入ってはいるがな…… じゃない！ 薫のヤツ…… 元気にやってんだな。嬉しい仲間達の様だし、千反田達ももううち解けているしな。今日は賑やかなひと時を過す事になりそうだ…… 俺には刺激が強すぎてもう体力切れだが……

「……これは無実だ！ 不可抗力だ！ 複雑怪奇な『縁』の絡みだ!! 俺は知らんっ!!」  
「ねねーっ!!」

・・・お約束の過ぎる後日談

おしまい

元ネタ

『ワイルドファイア』 第14話

去年の様な惨劇 第12話